とある２人と炎髪灼眼

ノラウサギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある２人と炎髪灼眼

【Ｎコード】
Ｎ４０９６Ｗ

【作者名】
ノラウサギ

【あらすじ】
シャナと悠二は学園都市から来たという２人の少年と出会う。しかし２人は学園都市第１位の能力者一方通行と第２位の垣根帝督だった。最強の２人を巻き込んでシャナの世界が幕を開ける！
【本作は灼眼のシャナととある魔術の禁書目録のコラボです。シャナをアニメでしか見たことのない私ですが精一杯頑張ります。キャラ崩壊の恐れがあるので苦手な方は読まないことをオススメします。】

2人の少年と紅世の世界

「オイ、どうなってんだよこれは」

「俺が知る訳ねェだろォが」

2人の少年が戸惑いを隠せずに周りを見渡していた。1人はホスト＋ヤクザ予備軍といった感じのそこそこ背の高い少年。もう1人は肌も髪も真っ白で細い体つきに赤い目の少年である。先ほどまで彼らは学園都市と呼ばれる場所にいた。暗部の仕事だからということでここ御崎市という聞いたこともない街のど真ん中にいたのだが突然街の人間が誰1人として動かなくなったのだ。まるで世界の時間が止まってしまったように。

『あれー？何でコイツら封絶の中で動いてるの？』

奇妙な声がしたと同時に馬鹿でかい人形と猫のぬいぐるみが2人の前に現れた。

「何だコイツら」

「さァな、お前の能力で作った物じゃねェのか？」

「こんな悪趣味な物作らねぇよ」

「メルヘンのくせにかァ？」

『うるさいぞお前達』

人形が突然拳を振り上げる。猫のぬいぐるみも2人に襲いかかった。

ドゴォ！

人形はホスト風の少年を仕止めたと思った。しかし、

「ムカついた。テメェはここで、」

ホスト風の少年の背中からは白い翼が生えていた。さらに猫のぬいぐるみは白髪の少年に一瞬でバラバラにされた。

「何だ何だよ何ですかァ？オマエらが一体何なのか知らねェが、」

2人の少年は不気味な笑みを浮かべ、

「「ブチ殺す！」」

封絶の気配を感じ、坂井悠二と『炎髪灼眼の討ち手』シャナは気配のする場所へ向かっていた。2人は先日狩人フリアグネを討滅しフ

リアグネ配下の燐子の一掃に追われていた。

「フリアグネの燐子だから放っていても消えるのに」

「でも他の人が犠牲になるかもしれないんだよ？」

面倒くさそうなシャナに少し苛立つ悠二。だがそんな2人も封絶の中に入って表情を一変させた。

「どうなっているんだこれ？」

しばらくの沈黙の後先に口を開いたのは悠二だった。建物がめちゃくちゃに崩れ、道路のアスファルトにはヒビが入っている。燐子が存在の力を集める為だけにここまで街を破壊するだろうか。

『何者かが燐子と戦ったようだな』

シャナの契約した紅世の王、天壌の劫火アラストールが慎重そうな声で言う。シャナもその何者かの気配を感じ取っていた。

「何者かって、他のフレイムヘイズ？」

悠二が尋ねる。しかしシャナは首を横に振った。

「違う。フレイムヘイズの気配じゃない。」

ドォン！

向こうで音が響く。悠二とシャナは音のした方へ走り出しそして見た。燐子と誰かが交戦しているのを。いや、交戦と言うより一方的な虐殺と呼ぶのが相応しいのかもしれない。

「オイオイ、さっきまでの勢いはどこ行ったんだァ？」

『ひぃぃぃぃぃ！』

悠二の目に映ったのは燐子をなぶる2人の少年。徒ではなさそうだがただの人間ではないことは一目瞭然だった。

「お前達何をしているの！」

シャナが2人の少年に叫ぶ。封絶は解けていない為、燐子はまだ生きているらしい。

「あぁ？何だこのガキ。コイツらの仲間か？」

ホスト風の少年が燐子を指差す。

「お前達は何？徒じゃないみたいだけど」

「徒？何だよそれ」

シャナは大太刀の贄殿遮那をしまうとアラストールに尋ねる。

「アラストール、封絶の中で動ける人間なんて…」

『我も聞いたことがないが……』

その時、突然燐子が爆発した。そのすぐそばにいた2人の少年は爆発に巻き込まれるが……

「はァ～もォ壊れちまったかァ？」

「一体何だったんだコイツ」

2人は無傷だった。悠二もシャナもその光景に目を見開く。

「君たちは一体何者なんだ？」

悠二が尋ねる。しかし2人はそんな悠二の問いかけを無視してこちらに背を向け立ち去った。

翌日～

「聞いたか坂井、あの学園都市から転校生が来るんだって」

池速人が興奮した様子で悠二に話しかけた。

「学園都市って？」

何も知らない悠二はつい聞き返してしまう。

「現代よりずっと科学が進んだ街だよ。何でも話によれば超能力の研究をやっているって」

「ち、超能力？」

昨日の2人が頭を過る。そして朝のHRの時間、この時から坂井悠二とシャナの運命は少なからず変わっただろう。

「えーと学園都市から来た……」

担任の声を遮り転校生の2人が自己紹介した。

まずホスト風の少年から

「垣根帝督だ。よろしく」

そして白髪の少年が自己紹介をした。

「一方通行（アクセラレータ）だ」

担任は2人の資料に目を通しながら簡単に述べる。

「彼らは学園都市の中でもとても優秀らしいから彼らの足を引っ張らないように」

そして休み時間、2人はお決まりの転校生への質問攻めに合った。

「ねぇねぇ学園都市ってどんなとこ？」

「超能力使えるの？」

「一方通行君ってどうして白髪なの？」

一方通行は面倒くさそうな顔をするとさっさと教室を出て行ってしまった。その後の授業を全てサボった垣根と一方通行は寝場所を探す為御崎市の街を歩き回っていた。

「オイ、どこまでついてくるつもりだ？」

垣根が追跡者に尋ねる。建物の陰からシャナと悠二が出てきた。

「オマエら何の用だ？」

一方通行が面倒くさそうに尋ねる。

「お前達何者？」

シャナが2人に問いかける。その鋭い視線にも全くたじろいだりしない垣根は深く溜め息をつくと

「言ったろ？俺は学園都市から来た垣根帝督って」

「それだけ？」

悠二も険しい表情で尋ねる。どうやら真剣に尋ねているらしい。

「強いて言えば学園都市で7人しかいない超能力者（レベル5）の第2位『未元物質』（ダークマター）ってとこかな」

垣根は笑いながらそう言った。

「それって強いの？」

興味津々の悠二。

「レベル5ってのはたった1人で軍隊を相手にできるって奴のことを言うんだ。俺はつまり学園都市で2番目に強い能力者ってことだ」

垣根が丁寧に説明する。シャナは黙ったままその説明を聞いていたが一方通行を指差して垣根に尋ねた。

「じゃあソイツは？」

「人のこと指差してンじゃねェこのクソガキ」

苛ついた口調の一方通行。ガキと呼ばれたことに腹を立てたシャナは一方通行を睨み付ける。まさに一触即発である。

「ところでさ、アンタら昨日あの妙な現象が起こった時に現れたよな」

垣根の一言に場の空気が変わる。

「なぁ、あの現象について何か知ってんのなら教えてくれねぇか？」

悠二はシャナの顔を見るがシャナは険しい表情のまま突然封絶を張った。

「！」

「！？」

一方通行と垣根は目を見開き目の前にいた少女を見る。少女は先ほどとは異なる雰囲気を纏っていた。炎のような赤い髪、赤い瞳。

「まずはお前達の実力を確かめる。それから話すか話さないか決める。」

その言葉を聞いた一方通行が楽しそうな笑みを浮かべる。

「腕試しってヤツかァ」

首をコキコキ鳴らしながらシャナと対峙する。

「待て一方通行、先に俺がやる」

垣根が一方通行の前に立った。黒いコートのような物から大太刀を取り出しながら垣根に視線を向けるシャナ。一方通行は舌打ちすると物見気分で悠二の隣に立つ。

「さてと、それじゃさっさと終わらせるかな」

「その減らず口がいつまで聞けるかしら！」

「そういやアンタの名前を聞いてなかったな」

「私は炎髪灼眼の討ち手シャナ！」

シャナが垣根に突っ込むと同時に垣根の背中から白い翼が発現する。

「さて、お手並み拝見といくか」

垣根帝督はにやりとした。

炎髪灼眼ｖｓ未元物質（前書き）

このストーリーの設定としてこの段階ではまだ一方通行の能力使用の制限がなく、垣根との仲がそれなりに良いという形で進めていきます。

それではどうぞ。

炎髪灼眼ｖｓ未元物質

シャナが大太刀を振り上げ垣根に斬りかかる。垣根はそれを白い翼で防ぐとその翼で暴風を起した。

ブォ！

「くっ！」

垣根の起こした風が少女を呑み込む。未元物質は本来この世に存在しない物質を創り出す能力である。彼の翼も能力で創り出したものであるからこの翼から放たれる攻撃が普通のモノであるとは限らない。

「腕試しとか言ってたがそれはこっちも同じことだ。アンタがどれ程のレベルなのか知りたいからな」

余裕の表情で垣根が言う。それはシャナに対する挑発に聞こえた。

「何？今の風……」

ただの攻撃ではなかったとシャナも理解していた。何故か風が『重い』と感じたのだ。

「俺の能力である未元物質は元々この世に存在しない物質を創り出す能力。この翼もその１つだ」

「その翼似合わないわね」

「まぁ自覚はある」

垣根が近くに落ちていた鉄パイプを拾い上げ意味ありげに笑った。

「俺の能力は物にも使うことができるんだぜ？」

そう言うなり鉄パイプを握りしめシャナに突っ込んだ。シャナはそれをかわすと再び垣根に斬りかかる。垣根はそれの攻撃を翼ではなく鉄パイプで受けた。ただの鉄パイプなら贄殿遮那で真っ二つになるだろう。しかし……

ガキィィン！！

垣根の鉄パイプは贄殿遮那の一撃を難なく防いだ。
しかも鉄パイプには傷１つ付いていない。

「今、この鉄パイプに『絶対に斬られない強度』を加えた。その刀の切れ味がどんなに良くてもコイツは斬れねぇよ」

「……っ」

『シャナ、もう少し様子を見るべきだ』

「わかってる」

アラストールに言われるが頭の中では分かっていた。目の前の男を相手に下手な手は打てないと。

「そろそろ終わりにするぞ！」

バォ！！

そんな2人の様子を坂井悠二と一方通行は少し離れた場所で見ていた。

「メルヘンの奴さっさと終わらせる気はねェみてェだな」

「垣根の能力があんなに強かったなんて……」

相変わらず暇そうな一方通行と垣根の能力に驚きを隠せない悠二。悠二の頭を1つの疑問が過った。隣にいる一方通行にその疑問を投げ掛けた。

「ねぇ、君は？」

「あァ？」

「君も垣根と同じレベル5ってやつなの？」

一方通行は表情を変えずに素っ気なく答えた。

「あァ」

そう言って再び視線をシャナ達に移した。

「うぉぉぉおおおお！！」

シャナと垣根がぶつかり合う。垣根は自身の能力で強化した鉄パイプで攻撃しつつシャナの攻撃を翼で防ぐ。シャナも猛攻を仕掛ける。垣根の翼に攻撃を防がれながらも攻撃の手を緩めない。２人の戦いは消耗戦になると思われた。

しかし両者には決定的な差があった。それは経験値の違いである。『化け物トーチ』こと天目一個に打ち勝ちここまで紅世の徒を贄殿遮那を武器に討滅してきたシャナである。それに対し垣根は学園都市内圧倒的な力を誇り第２位の座を確立させている。しかし能力である未元物質を使用しなければただの人間だ。白兵戦に持ち込まれたらどちらに歩があるかは明らかだった。

「これで終わりね！」

贄殿遮那に炎を纏わせ垣根に放った。

「この俺にこんなものが通用すると思ってんのかよ！！」

垣根は翼で炎を防ぐ。しかし炎を防ぐことに意識を向けていた垣根は翼の陰から突っ込んできたシャナに気づかなかった。

「なっ……！？（しまった！）」

「やあぁぁぁぁあああああっ！！！！」

死角からの攻撃を慌てて翼で防いだがシャナの一撃に力負けし、吹っ飛ばされビルの壁に叩きつけられた。

ドゴォン！！！！

「チッ、ムカついた」

服についた埃を叩きながら垣根がぼそりと言う。

「お前合格」

シャナが静かに告げた。しかし言われた垣根は不満のようだ。

「畜生、まだだ！」

「止めとけ第2位。腕試しのレベルで熱くなってンじゃねェ」

一方通行が垣根に言う。垣根は何のための腕試しかを思い出し笑いながらシャナに言った。

「まぁ合格なら約束通りいろいろ説明してもらうぜ」

「分かった」

シャナは着ている黒いコートに贄殿遮那をしまうと封絶を解いた。

「ねぇ、彼はいいの？」

結局実力を見ずじまいだった一方通行を指差し悠二はシャナに尋ねる。

「コイツが合格だからいい」

「オイ、コイツ呼ばわりはやめろ。せめて垣根って呼べ」

一方通行は自分の出番がなくなり再び退屈そうな顔をした。

「はァ～つまンねェ」

その後、再び学校へ戻り屋上で一方通行と垣根はシャナと悠二に紅世についていろいろと説明された。徒、フレイムヘイズ、自在法といった基本的な内容である。

「つまり俺達にケンカ売ったあの三下どもは燐子ってことかァ」

「で、その燐子どもは狩人って奴の使いっパシりだった。そしてあの奇妙な空間は自在法の封絶の中だったって訳か」

なかなか頭の回転の早い2人だった。

「だがその封絶ってのは普通の人間じゃ感知できねェンだろ？」

「うん、だからどうして一方通行と垣根が封絶の中で動けるのか分からないの。ただ2人から妙な気配がするのは分かる」

シャナは2人の顔を見てそう言った。

「妙な気配ねェ。それってＡＩＭ拡散力場のことなんじゃねェか？」

一方通行の意見に垣根も納得した表情をする。

「ああ、なるほどな。確かに少しは関係してるかもしれねぇな」

この会話についていけないシャナと悠二。

「何それ？」

悠二が2人に尋ねる。

「俺達にみてぇな能力者が無意識に放っているエネルギーみてぇな物だ」

垣根が2人に説明する。しかし悠二は多少理解した様だがシャナは全くと言っていいほど解ってなかった。

その後、2人と別れたシャナと悠二は帰路を歩いていた。先ほどコンビニで買ったメロンパンにとびきりの笑顔で噛みつく少女の隣を歩いていた悠二がアラストールに問いかけた。

「ねぇアラストールどう思う？」

『うむ、超能力者等という人間を見たのは我も初めてだ。フレイムヘイズとも徒とも異なる未知の存在といったところか』

「それにしても垣根ってなかなか強かったね」
メロンパンを頬張っていたシャナの手がピタリと止まった。
「はぁ、帰ったら鍛錬か……。垣根の能力が羨ましいよ」
『鍛錬してくれと頼んだのは誰だと思っているのだ。そんなことでは先が思いやられる』
「それでも少しは羨ましいって思うよ」
そんなことを呟く悠二を余所にシャナの目付きは真剣なものになっていた。
「アラストール、感じる？」
『うむ、他のフレイムヘイズの様だな。しかし我らが先にここにいると分かれば立ち去るだろう』

「ああ、もうっ。屍拾いの奴、厄介な所に逃げ込んでくれたわね！」
『ヒャハハハハ！まぁそう怒るなよ。我が麗しのゴブレット、マージョリー・ドーよ』
あるビルの屋上で眼鏡をかけた金髪の女性が御崎市を見渡していた。
その右腕には大きな本を抱えている。

「ねぇ、マルコシアス。この気配何だと思う？徒とフレイムヘイズとあと２つ……」

『さぁな、俺もこんな気配は知らねぇ。徒とフレイムヘイズ共々消しちまえばいいんじゃねぇのか。ヒャハハハハハハ！』

「確かにそうね。ちょうどすぐ近くに奇妙な気配が１つあるし」

そう言うとフレイムヘイズ、マージョリー・ドーは封絶を張った。さらに気配のする場所の真上まで移動すると真下にある謎の気配に炎弾を三発ほど放った。

ドガァ！

建物が崩れる。マージョリーは崩れた建物の傍まで移動し気配の正体を探す。

「ッたく、コーヒー買いに来ただけだっつーのによォ。随分と馬鹿みたいな三下が現れたもんだなァ」

瓦礫の中から白髪の少年が無傷で出てきた。一方通行である。彼は周りの様子を見て封絶の中であることを悟る。

「封絶かァ……。オマエ、フレイムヘイズって奴か？」

一方通行は無表情のまま問いかける。

「なぁんだ、ただの口の悪いガキじゃない」

『ヒャハハハハ！コイツは喰いごたえがありそうだぜ！』

マージョリーは余裕の笑みを浮かべた。しかしその瞬間、巨大なコンクリートの塊が凄まじい速度でマージョリーに向かって飛んできた。

「なっ！？」

『あぁ！？』

炎弾を放ちコンクリートを破壊するが動揺は隠せない。

「人の話を無視してンじゃねェよこの三下」

一方通行は不気味に笑うとマージョリーと対峙した。

「へぇ、なかなかやるじゃない」

マージョリーは手に持っていた本、『グリモア』を開き戦闘態勢に入った。

最強の超能力者

封絶の中で対峙するフレイムヘイズと超能力者。片や戦闘狂の異名を持つフレイムヘイズ、片や白髪の得体の知れない少年。普通のフレイムヘイズや能力者ですらその場から逃げ出す程のピリピリとした雰囲気が漂っていた。

「マルコ、さっさと終わらせるわよ」

『ヒャハハハハ！少しは楽しめるといいんだがな！！』

先手を打ったのはマージョリーだ。一方通行に炎弾を撃ち込む。群青色の炎弾がコーヒーの入った袋を片手に余裕の表情を見せる少年に向かって飛ぶ。

「こンなもンがこの俺に効くとでも思ってンのかァ？」

「！」

放った炎弾が跳ね返り自分の方へと飛んできたのだ。自らの放った炎弾にさらに新たに炎弾を放って相殺するがさすがに動揺は隠せないようだ。

（今、私が撃った炎は確かに当たったはず……）

マージョリーは一方通行が何をしたのか確かめる為、さらに４発の炎弾を放った。しかし、

「オイオイ学習能力ってのがねェのかこのババア。そンなンじゃい

つまでやっても変わンねェよ」

一方通行の余裕の声が聞こえたかと思うと炎弾の全てが再び自分に向かって飛んできた。マージョリーはそれを軽々と避けるがその表情に余裕はなかった。

（コイツ何もしていなかった？）

一方通行は立っているだけだった。炎弾が迫っても余裕の笑みを浮かべたまま一歩も動いてなかったのだ。

『オイ、マージョリー。コイツは予想外の展開ってヤツじゃねぇか？』

マルコシアスの問いかけにも彼女は答えなかった。

「さァて問題です。この俺、一方通行は一体何をしたでしょォか？」

残虐な笑みを浮かべながら一方通行は落ちていた小石を軽く蹴った。しかし軽く蹴られた小石のハズなのに先ほどマージョリーが放った炎弾より速い速度でマージョリーの傍を通過し、彼女の後ろに停めてあった車に直撃した。

ドゴォン！！！！

車は爆発し火柱が上がった。しかしマージョリーはそちらには目も

くれず鋭い視線で一方通行を睨み付けていた。

「アンタ、何者？」

マージョリーは徒でもフレイムヘイズでもないこの少年に訊ねた。

「テメェの耳は何の為に付いてンだ？飾りにしては目立たねェな」

一方通行は余裕の笑みから面倒くさそうな表情をする。

「さっき、一方通行って言ったわよね？」

「あァ？聞こえてンじゃねェか」

「アンタもしかして学園都市にいたんじゃない？」

マージョリーは以前ある徒を討滅するために学園都市に入ったことがあった。その時、街で会った能力者に一方通行という名前を聞いたのだった。

『ああ、なぁ～るほど。コイツはあの奇妙な街の人間ってことか』

マルコシアスが納得したように呟く。しかしマージョリーは一方通行の名前を聞いただけであり人物、能力については何も知らなかった。

「だから何だってンだ？」

「別に、ただアンタが私の攻撃を防いだことは理解するわ。学園都

市産の超能力といったところかしら。封絶の中で動けるのも納得がいくしね。確か……ＡＩＭ拡散力場だったかしら？」

「随分とお喋りな三下だなァ」

「少しは人の話を聞いたらどうかしらこのガキ」

そう言いながらもマージョリーは答えを探していた。この少年の能力が何なのかを。攻撃を跳ね返すこの少年に攻撃を当てるにはどうすればいいのかという打開策が見つからなかった。

『確かあん時も能力者って奴に絡まれたんだったよなぁ。あの時は大変だったぜ』

マルコシアスが思い出したように言う。一方通行は何故かうんざりしたような視線でグリモアを見た。

「うるせェ本だな。綺麗な紙吹雪みたいにされたくなかったらちったァ黙ってろ」

『言うねぇ。コイツはホントに喰いがいのある奴だなぁオイ！ヒャハハハハハハハ！！』

マルコシアスはマージョリーとは違ってこの状況を楽しんでいるようだ。

「マルコ、本気でいくわよ！！」

『了解だぜ相棒！！』

マージョリーは獣型の衣『トーガ』を纏う。すると数体の分身が現れた。群青色の獣が一方通行を取り囲むが一方通行の表情は変わらない。

「全方位からの攻撃なら少しは効くんじゃない？」

「そォ思うのならやってみろ三下が」

ブオォ！！！！

マージョリーの攻撃は全方位から一方通行を襲った。さらにマージョリーは新たに自在法を発動させる。群青色の炎の槍が雨のように一方通行に降り注ぐ。しかし結果は同じだった。

「！」

『！』

全方位からの死角のない攻撃は全て跳ね返り本体を含め全てのトーガにヒットした。

「ぐっ……、何で！？アンタ、一体……」

『しっかりしろマージョリー！来るぞ！』

マージョリーが気づいた時には目の前に一方通行の拳と彼の一言が耳に入った。

「あばよ三下」

ドゴォン！！

頬に一方通行の拳を食らった弔詞の詠み手は数メートル飛ばされその体はビルを貫通し、そして見えなくなった。一方通行は先ほどマージョリーとの間合いを詰めた際に投げ捨てた缶コーヒーが何本も入ったビニール袋を拾い上げる。

「ッたく、学園都市並みに退屈しねェ街だな」

吐き捨てるように言うとその場を後にした。

『見事にやられちまったな相棒』

「前に学園都市で会った麦野っていう能力者もそうだったけど得体の知れないのよねあの連中。あんな細い腕してるくせにこのパンチ力、やってらんないわね」

瓦礫の中から出てきたマージョリーは殴られた頬をさすりながら溜め息をついた。

「まったく、レディーの顔を殴るなんてどういう神経してんのかしら」

『ヒャハハハハハ！戦闘中にぼーっとしてっから殴られたんじゃねぇか。だからあのガキに三下とか言われんだよ。えっ、我が親愛なる契約者マージョリー・ドーよぉ。ヒャハハハハハハハハ、ぐへっ！』

「おだまり馬鹿マルコ」

マージョリーはグリモアを殴りつけマルコシアスを黙らせた。

「……！マルコ」

『ああ、フレイムヘイズともう一匹の気配だ。気配のからしてこいつも能力者かもしれねぇな』

「冗談じゃないわ。あんな奴と戦った直後にフレイムヘイズと能力者だなんて。ここは一旦退くわよ」

『そうした方が良さそうだな』

そう言うとマージョリーは存在の力で街をある程度修復しグリモアの上に乗るとすぐにその場を後にした。

続・最強の超能力者

一方通行とマージョリーが戦っている頃、封絶の気配を感じたシャナと悠二は帰路を引き返し現場へと向かっていた。

『あのフレイムヘイズ、どうやら立ち去らなかった様だな』

「そのフレイムヘイズが封絶を張ったってことは徒が現れたってことかな？」

走りながら悠二が尋ねる。しかしシャナは首を横に振った。

「いや、多分……」

答えようとした時、正面の建物の陰から垣根が走って行くのが見えた。

「垣根！」

シャナの声に垣根は振り返る。あまりにも大きな声で呼んだため近くを歩いていた通行人から注目を浴びるがそんなことを気にしている場合ではなかった。

「あ？シャナに悠二じゃねぇか」

垣根も封絶の方へと足を進めていた。シャナが垣根に事情を聞くと一方通行はコーヒーを買いにコンビニへ出かけたらしいのだがその直後に彼の行った方で封絶が張られたのが見えたというのだ。

「じゃあ例のフレイムヘイズの相手って……」

悠二が言いかけて口をつぐむ。その後に出てくる名前など分かっているからだ。

「間違いない、一方通行よ」

3人は封絶へと急ぐ。封絶の中に入るとシャナの髪や目の色が紅蓮に染まった。向こうの建物からは時々群青色の閃光が見える。

『群青色の炎……！』

「アラストール、知ってる奴？」

『恐らく蹂躙の爪牙マルコシアスと弔詞の詠み手マージョリー・ドーの様だな。奴等は己の闘争心を満たす為だけに戦う、いわゆる戦闘狂だ』

「えっ！？それってヤバいんじゃない？もしかしたらもう一方通行と戦ってるんじゃあ……」

悠二が戸惑うように言う。確か一方通行は垣根と同じレベル5だと悠二に話した。しかしその実力をまだシャナも悠二も知らない。

「アイツなら心配ねぇよ」

垣根がそう言って少し表情を曇らせた。

「どうして？垣根は第2位の能力者なんでしょ？垣根より弱い奴がフレイムヘイズ相手に戦える訳ない」

シャナがきっぱりと言う。遠回しに垣根＝弱いという風に言っているが垣根はそれをスルーした。

「違う。2人はアイツの能力を知らねぇ。知ってたならそんなことは言えねぇからな」

「え？それって……」

悠二もシャナは悟ったようだ。

「ああ、アイツは学園都市に7人しかいないレベル5の頂点、学園都市最強の能力者だ」

3人が到着した時にちょうど封絶が解けた。その5分後、左手にコンビニのビニール袋を持った一方通行がこちらに歩いて来るのが見えた。

「よぉ、コーヒー買うのに馬鹿に時間がかかったな」

コンビニ袋に少しではあるが埃付いているのを指差して垣根がわざとらしく言う。

「あァ、随分と面白ェ三下と暇潰しをしていただけだ」

そう言いながらも退屈そうな表情の一方通行。

「どんな奴だった？」

シャナが問いかける。一方通行はビニールから缶コーヒーを取りだし一本開けると

「馬鹿みてェな笑い方をするでけェ本を抱えた女だ」

そう言ってコーヒーを飲む。

「ねぇアラストール」

『間違いない。弔詞の詠み手と蹂躙の爪牙だ』

「でもコイツには傷１つ付いてない」

『……』

「ねぇ、一方通行の能力ってどんな能力なの？」

悠二が訊ねる。一方通行はもうコーヒーを飲んでしまったらしく空になったアルミ缶を握り潰すと悠二からの問いかけに答えた。

「俺の能力の名は一方通行（アクセラレータ）だ」

「は？え、えっと……」

「そもそも一方通行ってのは俺の名前じゃねェ。名前なンざとっくに忘れちまった。他の連中がそォ呼ぶだけだ」

「そんなことはいい。お前はどんな能力を持ってるの？」

悠二ではなくシャナが訊ねる。

「俺の能力は『ベクトル操作』。俺が触れているあらゆる物のベクトルを操ることができる能力だ」

それはつまり運動量、熱量、電気量といったベクトルを持つ物なら触れただけで操ることのできる力である。しかしベクトルという言葉に馴染みのないシャナと悠二は首を傾げる。

「その能力が学園都市で一番なのか？」

「なんかよく分かんない」

悠二もシャナも想像がつかないらしい。一方通行は溜め息をつくと握り潰した缶コーヒーを悠二に投げ、背を向ける。

「それを俺に投げてみなァ」

「えっ？でも……」

「さっさとしろ」

一方通行に言われた通り悠二は缶コーヒーを一方通行に投げる。缶は一方通行に当たる直前に跳ね返り悠二に向かって飛んできた。

「うわっ！」

「ベクトルってのは向きと大きさのことだ。今俺は生活するのに必要な物以外のベクトルを反射してる訳だ。だから炎だろォが核ミサイルだろォが直撃しても傷１つつかねェ」

悠二もシャナも驚きで言葉を失った。理由は１つ、目の前にいる少年の能力が最強と呼ばれる力であると理解したからだ。弔詞の詠み手が戦闘狂と呼ばれる程の実力者でもそう簡単には倒せないと思った。

「それで弔詞の詠み手は？」

シャナが今、一番気になっていたことを訊ねた。

「あの三下ならどっか行っちまった。今頃その辺をふらついてンじゃねェのか」

「ああ、もうっ！イライラするわね！」

『まぁまぁ落ち着けよ相棒』

「落ち着ける訳ないでしょ！この私があんなガキに負けたのよ！？屍拾いの奴も見つからないしホント最悪」

マージョリーは苛ついた表情を見せながら路地裏を歩いていた。

『で、今夜はどこで寝るんだ？適当に男でも作って泊めてもらうか？』

マルコシアスがそう言った時、制服を着た2人の少年が大勢の不良に囲まれているのが見えた。1人は愛嬌のある顔をした大柄な少年、もう1人は不良っぽい華奢な美少年だった。もともとイライラしていたマージョリーはそのストレスを発散すべく不良達に突撃していく。

「アンタ誰だ？」

少し不良っぽい顔の美少年が訊ねた。結局、1人で不良達を壊滅させたマージョリーは結果として2人の恩人の様な形になった。

「あらあら、助けてあげたんだからお礼くらい言ったらどう？」

「別に助けてくれなんて頼んだ覚えはねぇよ」

不良っぽい美少年はそう言って顔を背けたが愛嬌のある顔をした少年は

「あ、ありがとうございました。あの、アナタを姐さんと呼ばせてください」

「別にいいわよ。そうだ、ねぇアンタ達ちょっとこれから私の仕事に付き合ってくれない？」

マージョリーはこの街に逃げ込んだ『屍拾いラミー』という徒を追

っていた。迅速かつ効率的に討滅するには土地勘のあるこの街の人間の協力が必要なのだ。

「え？いいですけど……」

「アンタ達の名前は？」

先に愛嬌のある少年が名乗った。

「俺は田中栄太」

「俺は佐藤啓作だ」

続いて美少年。見た目によらず素直な性格らしい。

「栄太と啓作ね。私はマージョリー・ドー。コイツはマルコシアス。」

『よろしくなぁご両人。ヒャハハハハハハハハハ！！』

驚く栄太と啓作を無視してマージョリーは話を進める。

「コイツのことと仕事のことについては後で説明するわ。その前に……」

そう言って考える様な仕草を取ると2人に訊ねた。

「まず酒が飲めて広くてくつろげる場所知らない？」

御崎高校の昼休み

吉田一美はクラスの中でも比較的おとなしく内気な少女である。翌日、御崎高校へ登校途中の悠二とシャナは『たまたま』彼女と出会った。まるで謀ったかのようなタイミングで曲がり角から出てきた一美に鋭い視線を向けるシャナ。

「お、おはようございます坂井君、ゆかりちゃん」

シャナの視線など気にせず挨拶をする悠二。

「おはよう吉田さん」

挨拶を返された内気な少女は可愛らしい笑みを浮かべて去っていった。2人が学校に着くと校門の前で一方通行と垣根が生活指導担当の教師に説教を食らっていた。制服のボタン全開でその下に白地にグレーのラインの入った服を着ていた一方通行は街で不良に絡まれ全員病院送りにしたのである。否、病院送りにしたというより勝手になったというのが正しいのかもしれない（ベクトルを反射している為、彼を殴った不良の手首が有らぬ方向へ折れたのだ）。垣根もまた朝っぱらから不良とケンカし（本人曰くムカついたから）全員病院送りにした。登校2日目で教師に説教を食らう生徒は珍しくはない。しかし登校2日目という前に2人はこの街に来て2日目なのだが（当然ながら2人とも話は聞いていない）。

「おはよう、垣根に一方通行」

悠二が挨拶すると垣根は説教している教師を無視し悠二の方を向いた。

「おーす、悠二にシャナ」

一方通行はというと目を閉じたまま動かない。立ったまま眠っているのだろうかと思うほどだ。説教は終わったらしく生活指導担当教師は職員室へと戻っていった。しかし一方通行はそこに立ったままだ。シャナ達が首を傾げていると目を開けた一方通行はシャナ達と目が合った。

「よォ」

「もしかして寝てたの」

シャナの問いかけに一方通行は首を横に振った。

「面倒だったから耳に入ってくる音を反射してただけだ」

要は何も聞いてなかったのかと苦笑いする悠二。４人はすぐに教室へと向かった。

「頭痛い～！割れる～！頭の中で星がぐるぐる回ってるぅ～！」

弔詞の詠み手マージョリー・ドーは佐藤家のソファーの上で二日酔いに苦しんでいた。啓作の家で居候することになったマージョリーは栄太と啓作に紅世について説明するついでに盛大に酒盛りを始め、

この有り様である。

『大して酒に強くねぇ癖にあんなに飲むからだ。我が泥酔なる天使マージョリー・ドーよぉ。ヒャハハハハハハハハハハ！！ぐへっ！』

「うるさい馬鹿マルコ！耳元で大きい声出さないでよ！！」

枕代わりに使用したグリモアを殴りつけうるさい契約者を黙らせるマージョリー。戦闘狂と呼ばれる彼らだが今はその欠片すらない。

「大丈夫ですか姐さん」

声をかけたのは栄太だ。結局一晩紅世について説明された啓作と栄太はマージョリーの酒盛りに付き合わされる羽目になったのだ。

「マルコシアス頼む！姐さんを楽にしてやってくれ！」

『ダメだダメだ。ここで甘やかしたらまた調子に乗るぜ？』

「馬鹿マルコ～！殺す！」

マージョリーはわめくがマルコシアスはそれを楽しんでいる様だ。啓作は溜め息をつくとマージョリーの傍にコップ一杯の水をテーブルに置くと

「じゃあそろそろ学校行くんで」

「おい姐さんを放っておくのかよ？」

「俺達がいたところで二日酔いは治りゃしねぇよ」

『コイツはいつもこうなんだよ。今に始まった訳じゃねぇから気にせず行きな』

栄太は少し躊躇いながらも啓作の後を追った。

「おい！垣根に一方通行！お前らちゃんと授業を受けろ！」

転校してからまだ2日なのにも関わらず職員室でも噂される不良少年、一方通行と垣根帝督はまともに授業を受けていなかった。彼らは登校初日に授業をサボり朝っぱらから不良を病院送りにして説教された2人である。さらにケンカを売ってきた上級生を返り討ちにしするなど2人の評判は学校中に広がっていた。

「面倒臭ェ……」

眠たそうな表情の一方通行。垣根に至っては授業中に音楽プレイヤーで音楽鑑賞中である。

「お前達この問題が解けるのか？」

数学の授業担当の教師は黒板をバシバシ叩きながら問いかける。しかし一方通行は表情ひとつ変えず、

「そンな問題解けるに決まってンだろォが」

垣根も、

「楽勝だな」

こんな調子である。最も学園都市で頂点に君臨する彼らは能力使用の際に高度な演算を行っている。彼らにとって理数教科はお手の物なのだ。悠二は隣に座っているシャナを見る。シャナもシャナでまともに授業を受けている様子はなく、ムスッとした顔のままだ。悠二は深々と溜め息をついた。

気づけば昼休みの時間となっていた。悠二とシャナ、池、一美は机をくっ付ける。相変わらず悠二はコンビニのおにぎり、シャナはメロンパンである。

「俺たちもいいかー？」

栄太と啓作、緒方真竹も弁当片手にその輪に混ざった。

「ねぇ垣根も一緒に食べない？」

池が1人でカップラーメンをすする垣根に声をかける。学校に来て昼食がカップ麺ってどうよ、と思うメガネマンこと池速人。垣根は池に視線を移すと

「いや俺は遠慮する」

そう言いながら具材の肉を口に入れた。池としては垣根や一方通行に学園都市についての話を聞きたかったというのもあり少し残念そうな顔をした。

「あ、あの……坂井君っていつもコンビニのおにぎりなんですね」
少し顔を赤らめながら一美が言う。
「まぁね、母さんにいろいろ言われてるんだ」
笑いながらコンビニおにぎりを頬張る悠二。そしてこの場にいない少年のことを口にした。
「ところで一方通行は？」「ああ、アイツなら1人で屋上で飯食ってたぞ」
啓作が思い出したように言う。昼食を済ませた悠二とシャナの2人は屋上に様子を見に行った。そこでは一方通行が屋上から見える御崎市の景色を眺めながら缶コーヒーを飲んでいた。
「何してるんだ？」
「よォ坂井に炎髪か……見ての通り飯食ってンだよ」
ぶっきらぼうに答えると串に刺さった唐揚げを頬張る。
「どうして1人で食べてるの？」
「オマエの知ったことじゃねェだろ」
そう答える一方通行が悠二にはどことなく寂しげに見えた。
「用がねェならさっさと消えろ」

一方通行はそう言って空になった缶コーヒーを握り潰す。２人はその場を後にした。
「アイツのことなら気にすんなよ」
屋上の物陰から垣根が出てきた。
「アイツはいつもああなんだ。自分の力で他人を傷つけるのが恐いのさ。だから友達も作らない、まぁ同じレベル５の俺は別だがな」
「どういうこと？」
シャナが訊ねると垣根は一方通行の過去について語った。幼い頃、能力の制御ができず周りの人間を傷つけ軍隊を敵に回しても傷１つつかなかった。大人達は彼を指差して言った。『化け物』と。学園都市に行っても研究所を転々とした、そんな過去が今の一方通行を作っているのだと垣根は言った。
「俺も似たようなモンだ。だからアイツの気持ちはよく分かる」
キーンコーン
その時、昼休み終了のチャイムが鳴った。
「さて、また面倒な授業を受けますか」
垣根は笑いながら階段を降りて行った。２人が振り返ると屋上で天を仰ぐ白髪の少年の姿がとても小さく見えた。

銀色の炎を持つ徒

家に帰った啓作は栄太と共にマージョリーの様子を見に行った。ドアを開けると何かがぶつかる音と『あ痛っ！？』という声が聞こえた。ドアの傍にグリモアが落ちていたのだ。

「マルコシアス？何でこんなところに？」

『おお、帰ってきたのかご両人。親愛なる契約者マージョリー・ドーは今安らかに眠っているところだぜ』

栄太はグリモアを拾い上げるとマージョリーが眠っているソファーの傍のテーブルの上に置く。

『ありがとよ。コイツさっき寝ぼけて俺のこと投げやがったからな』

「なぁマルコシアス」

啓作が真面目な顔で訊ねた。マージョリーから紅世について聞かされた時からずっと疑問に思ってたことだ。

「フレイムヘイズってのは復讐者なんだろ？じゃあマージョリーさんも紅世の徒に大切な人を奪われたのか？」

『オイオイ気になるのか？』

「……」

『なら見せてやるよご両人』

啓作と栄太が「え？」と聞き返す間もなかった。まず2人の目に映ったのは炎。辺り一帯が燃えている。その中に銀の炎を吹き上げる西洋の鎧が立っていた。鎧の隙間から虫の足が這い出し、まびさしからは無数の目が嘲笑に染まった目を覗かせている……。

「……っ！？」

2人がハッとした時、マージョリーが腕を組んで仁王立ちしていた。

「馬鹿マルコ、アンタ何勝手なことしてんのよ」

そう言ってグリモアに拳をぶつけるマージョリー。

『いいじゃねぇか我が怒れる淑女マージョリー・ドー。俺だって久しぶりにこのご両人と語りたい気分なんだよ』

溜め息をつくマージョリーに栄太が訊ねた。

「今の奴が姐さんの大切な人を？」

マージョリーは無言のまま首を横に振った。

「あの銀の徒はどうなったんですか？」

啓作がマージョリーに訊ねるが代わりにマルコシアスが答えた。

『まだ見つからねぇ。俺が現世(こっち)に渡ってきた時には奴はすでに姿を消してた。徒ってのはそれぞれ炎の色が違うんだが銀色の炎なんて聞いたことがねぇしな』

「姐さん！俺どこまでもついていきます！」

突然栄太が宣言した。唐突な宣言にマージョリーは目を丸くして栄太を見てそして軽く笑った。

「銀の前にまずはこの街にいる屍拾いの奴からよ。この前は邪魔が入ったし他にフレイムヘイズがいるみたいだし面倒だけどね」

彼女の脳裏に一瞬、あの白髪の少年の姿が過った。どんな攻撃も跳ね返すあの少年。

「はぁ～厄介ね」

マージョリーは深々と溜め息をついた。

「いい？しっかり相手の『殺し』を感じて」

坂井家の庭でシャナと悠二が鍛練をしていた。勿論悠二がシャナに頼んだからである。

ドガッ！

「痛っ！」

シャナの振り回す棒を避けきれずに頭に思い切り攻撃を食らってその場に倒れる悠二。アラストールが呆れた声で言った。

『まったく、何度言えば分かるのだ。目を閉じるなと先ほどから言っているだろう』

「全然進歩してない」

シャナも持っていた棒を置くと溜め息をつく。

「そんなこと言ったって……」

「なかなか面白いことやってるな」

気づくと庭の塀に垣根が座っていた。頭を押さえてうずくまる悠二をニヤニヤしながら見ている。

「垣根はそんなとこで何してるの？」

シャナが垣根に鋭い視線を向ける。

「そう睨むなよ。まったくフレイムヘイズってのはどいつもこいつもそうなのかアラストール？」

『……』

垣根はアラストールと直に話すのは初めてだったがまるで仲の良い友人に声をかけるように訊ねた。が、アラストールも何も答えない。垣根はやれやれと言いたげな顔をすると悠二に視線を移す。

「アンタも大変だな。零時迷子のミステスってのはこんなこともしなきゃいけねぇのか？」

『こやつが頼んだのだ。我らが強制した訳ではない』

ふーん、と曖昧な反応をすると思い出したように言った。

「そう言えばさ、昨日一方通行に奇妙な奴に会ったって聞いたんだよ」

「奇妙な奴？」

悠二が聞き返す。

「なんか杖をついた老人だとさ。変わった名前だったから紅世の徒じゃねぇのかって」

「そいつの名は？」

「確か……『屍拾いラミー』とか言ってたか？」

「！」

『！』

垣根の発したその名にシャナとアラストールが反応する。

『屍拾いだと？彼を一体どこで？』

「あ？一方通行の話だと俺達が屋上から立ち去った後らしいぜ？」

『あの戦闘狂の狙いは屍拾いラミーか……！』

シャナも険しい表情だ。悠二も垣根も「え？誰それすごいの？」と今にも言い出しそうな顔をする。

「ラミーは消えかけのトーチしか喰わないの」

『長い間、奴が溜めてきた存在の力は膨大だ。奴が消えればその存在の力が行き場をなくし世界のバランスにかなりの影響を与えるだろう』

「つまり一触即発の核弾頭ってワケかァ？」

気づくと垣根が座っている塀から一方通行が顔を出した。

「あ、一方通行！？どうしてここに」

「オマエ達の会話が聞こえただけだ。ッたく声がでか過ぎンだよ」

やれやれといった様子の一方通行。しかし話が理解できているのは

シャナ達にとっては大きい。

「とにかくやることは1つ」

シャナが険しい表情のまま呟く。彼らはこれから屍拾いラミーを見つけなければならない。しかも戦闘狂であるマージョリーより早くだ。

「よりにもよってこれからかよ。ホント退屈しねぇな」

垣根は楽しそうに笑ったがシャナは首を横に振った。

「今から探しても見つかる可能性は低すぎる」

「じゃアどォすンだ？」

一方通行の問いかけに悠二が答える。

「弔詞の詠み手もラミーの場所はまだ分かってないんだろ？なら待っていれば気配察知の自在法を使うはず。僕たちが動くのはその時だよ」

なかなかの案だと感心する2人のレベル5だったがシャナがその考えに反論する。

「でもラミーの戦闘力は0に等しいのよ？相手が動くのを待ってたら間に合わない」

シャナの意見を聞き考えをまとめた垣根が発言する。

「なら一方通行、俺、シャナと悠二の三組に分かれてそれぞれのエリアで待機ってのはどうだ？」

マージョリーが気配察知を使用し、ラミーの場所が分かった時点で一番近い者がマージョリーと交戦するというのが垣根の考えだった。

「まァ学校なンてつまンねェとこに行くよりはマシだ」

なんだかんだで今日の午後の授業を全てサボった一方通行。出席日数大丈夫かよコイツと変な心配をしながら一方通行を見る悠二。

「シャナと悠二は学校に行くだろうから俺と一方通行で何とかする」

垣根がにやにやしながら言う。垣根も暴れたくてうずうずしていたのだ。

「さァて愉快な三下狩りを楽しむとするかァ」

翌朝、マージョリーは啓作と栄太が御崎市の廃デパートの高層階で発見したある宝具を前に不気味な笑みを浮かべていた。

「玻璃壇ねぇ……狩人の奴いいもの残してくれたじゃない」

彼女の目の前にある宝具、それは狩人フリアグネの所持していた銅鏡型宝具、名を『玻璃壇』という代物であった。これは周囲の物体を集めて巨大な箱庭を形成し一定区域（今は御崎市）の人間と存在の力を監視する物だ。

『これで屍拾いのクソ野郎を見つけられるぜ』

マージョリーは啓作と栄太に護符を渡す。

「これで私と連絡が取れるからこの玻璃壇を見ながら私に屍拾いの場所を教えなさい」

そう言うなりマージョリーはグリモアに乗って廃デパートの屋上へ昇ると気配察知の自在法を使用した。

「姐さん！反応がありました！そこから東の方向……ってあれっ！？」

「どうしたのよ？」

「反応が……消えた？」

護符から栄太の戸惑う声が聞こえてくる。

「もう一度使うから今度は見失うんじゃないわよ？」

「動いたな」

『あァ、だが俺達より坂井と炎髪の方が近ェ。』

それぞれ担当のエリアから携帯で連絡を取り合っていた一方通行と垣根（当然ながら学校はサボりである）は空を見上げて行動を開始した。

通常の人間は紅世に関わる物に干渉はできないがこの2人は違う。封絶の中で動けるし徒だって見え気配まで感じ取れる。（あくまで少しである）それは2人が放つＡＩＭ拡散力場が原因なのだが詳しいことはまだ分かっていない。

「……！悠二」

学校で授業中だったシャナと悠二も自在法の気配を感じ取っていた。シャナは悠二が何か言う前に立ち上がる。

「ど、どうした平井？」

びくびくしながら先生が質問する。

「私体調が悪いから早退する」

そう言うなり悠二を引っ張って教室を出て行ってしまった。その出来事を唖然としたまま見ていたクラスメイト＋先生。もはや授業どころではなくなっている。「平井ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！どうしてくれるんだよこの空気を！！」そう言いたい、先生の心の叫びであった。

シャナと悠二は学校を出るとマージョリーの気配察知の自在法を利用してラミーの場所へと急ぐ。

「……！」

2度目の気配察知の自在法が発動した。しかもラミーの気配は先ほどの場所からさらに数ｋｍ離れた場所にあった。

「ラミーが移動してる！」

『なんという速さだ』

これでは追っても追っても追い付くハズがない。マージョリーが追撃に苦戦するのも頷ける。

「ねぇシャナ！これじゃあ僕らも弔詞の詠み手と同じなんじゃないかな？」

悠二の言葉にシャナは足を止める。

「ラミーがこんなに速く移動できるのならとっくに逃げ切れてるハズだよ。つまり自在法か何かで動きを撹乱してるんじゃないかな？」

『なるほど』

「じゃあ……！」

シャナが何か察したようだ。悠二が自信の籠った声で言った。

「ラミー自身は動いていない！」

「……ッ！」

その時、建物の向こうで封絶が張られたのが見えた。

蹂躙の爪牙マルコシアス

封絶を張ったのはマージョリーだ。ラミーの気配のトリックを見破ったのだ。きっかけは啓作の一言だった。

「なぁマージョリーさん、トーチって人間以外にいるのか？」

「はぁ？いるわけないじゃない」

「いや……鳥が……鳥が映ってるんですけど」

「鳥のトーチですって？」

ホントだ、という栄太の声も聞こえる。玻璃壇に鳥が映ってるのは本当らしい。

『おいおい玻璃壇がイカれちまったってか？』

マージョリーは少し考えると

「なるほどね……そういうことか。啓作！栄太！鳥がどの方向へ向かっているか教えなさい！」

マージョリーは気づいたのだ。屍拾いラミーがどんなトリックを使用していたのかが。町中のトーチに寄生させた自らのダミーを巧みに利用し自らの気配を移動させる。そうすることで気配察知の自在法を誤魔化すことが可能だったのだ。

『ちょこまかしやがって……！本当にムカつく野郎だなオイ！』

マルコシアスが怒りを露にする。しかし、トリックが分かってしまった以上、惑わされることはない。

「姐さん！鳥は美術館の方へ向かっています」

栄太の声を聞くと同時にグリモアは美術館の方へと進んでいた。

『あ～イライラするぜ』

「啓作、栄太。今のうちに言っておくわ」

「？」

「ありがとう。この仕事が終わったらこの街を出ていくわ」

護符から2人の戸惑いの声が聞こえる。それを聞いてマージョリーは軽く笑う。

「だから姐さん、俺達も一緒に……」

「ダメよ」

栄太の言葉はマージョリーのぴしゃりとした一言に遮られる。

「徒なんて生きてる内はなかなか会わない。むしろ会わない方がいいのよ」

『じゃあなご両人。残りの人生に幸あれヒャーッハハハハハハハハハハハ！！』

マルコシアスの笑い声を最後に護符から声はもう聞こえなかった。
「勝手すぎんだよ……人のこと使うだけ使っといてよ……マージョリーの馬鹿野郎が…」
クシャッという音がした。啓作はもう聞こえなくなった護符を握りしめながら悪態をついた。

「オイオイ、炎髪と坂井は間に合うのかァ？」
「知らねーよ。つーか何で弔詞の詠み手は俺達より先に屍拾いを見つけたんだよ？」
「それこそ知らねェよ」
一方通行と合流した垣根は封絶の中へ入り弔詞の詠み手の気配のする方へと急いでいた。
「間に合えよクソッたれがァ！！」
一方通行は足の裏にかかる運動量のベクトルを操作しビルとビルの間を飛び越えながら移動する。垣根は勿論飛行中だ。

「間に合えよシャナ……」

垣根は歯ぎしりしながら速度を上げた。

御崎市の美術館で弔詞の詠み手マージョリー・ドーは屍拾いラミーの前に立ちはだかっていた。

「こんにちは屍拾い」

『早速だがよ、ここで死ねクソ野郎！！』

マージョリーはトーガを纏うと戦闘態勢に入る。ラミーはそれを無表情の顔で眺めながらマージョリーとは別の方向へ視線を移した。

『……！来たぜマージョリー！』

「構わないわ。屍拾い共々叩きのめしてやるわよ！！」

パリィィィン！！

美術館の天窓を破って現れたのは、

「炎髪……！」

『灼眼か……！』

紅蓮に染まった髪や瞳に夜笠を纏った炎髪灼眼の討ち手シャナだった。

「間に合った……！」

シャナは地面に着地するなり夜笠から大太刀、贄殿遮那を取りだし構える。シャナの肩にしがみついて来た悠二は見事に着地に失敗したがすぐに立ち上がりラミーの傍へと走る。

「はぁ～、いきなり現れてその上武器まで構えるなんて礼儀知らずなガキんちょね。せめて『こんにちは』ぐらいあってもいいんじゃない？」

マージョリーはトーガから顔を出しやれやれと言いたげな表情をする。

『ヒャハハハハハハ！！久しぶりだな天壌の劫火。そいつがお前の契約者、炎髪灼眼の討ち手か？』

マルコシアスの問いかけにアラストールは答えない。

「先に名乗らせてもらうわ、私は天壌の劫火アラストールの契約者、炎髪灼眼の討ち手名前はシャナ！！」

「アンタが炎髪灼眼の討ち手ねぇ……。どうでもいいけどアンタの後ろにいる屍拾いをこっちに渡してもらえるかしら？」

「断る！」

2人のフレイムヘイズの間をピリピリとした緊張感が走る。それは離れた場所で見ていた悠二もラミーも感じとれた。

「アンタもフレイムヘイズなら分かるでしょ？徒は殺すしかないってことぐらい」

「ラミーの討滅はこの街に被害を及ぼす可能性がある。私達フレイムヘイズの使命は紅世とこの世のバランスを保つことよ」

『俺達は仕事熱心なフレイムヘイズだからなぁ。後顧の憂いは断っておかねぇと。ヒャハハハハハハハハ！！』

『黙れこの戦闘狂が！』

『言ってくれるねぇ天壌の劫火』

マージョリーはトーガから顔を出したままシャナに問いかける。

「アンタ、フレイムヘイズのくせに徒を庇うの？」

その問いかけに表情1つ変えずに答える。

「私は世界のバランスを保つために害となる徒を討滅している。でもお前は殺したいから殺しているだけよ！」

その一言にマージョリーの表情が怒りで歪む。

「それの何が悪いのよ！」

マージョリーはトーガを纏いシャナに炎弾を放った。シャナはそれをかわすと一気に間合いを詰める。

（力が湧く。今なら何でもできる！）

群青の炎弾をかわしトーガに斬りかかった。

スバァ！！

完全には捉えきれなかったが贄殿遮那の切っ先はトーガをかすった。

「（速い……！）」

『なかなかやるじゃねぇか！』

シャナの速度に目が追い付かなかったマージョリーは若干の焦りを覚える。しかしすぐに次の一手を打つ。トーガの分身を作るとその分身が一斉にシャナを包囲した。

「さぁ～て、どれが本体か分かるかしら？」

シャナは鋭い視線で複数に分かれたトーガを見渡し、

「やぁぁぁぁぁあああああああっ！！」

飛び上がったかと思うと大太刀をトーガの一体に振り下ろした。

『なっ……！？馬鹿な……！？』

「当り……！？」

シャナの一撃はマージョリーの本体を捉えていた。

『このガキがぁ！！』

マージョリーは先ほど放った炎弾を連射する。しかしシャナはその攻撃を避けながら再びマージョリーとの間合いを詰めた。

(悠二がいる……。私は何でもできる！)

炎弾を避けながらついにマージョリーの懐へと入った。

「しまった……！」

マージョリーがそう思うのと贄殿遮那がトーガを貫くのはほぼ同時だった。

「あぁぁぁぁぁあああああああああああ！！！！」

群青色の炎が傷口から溢れていく。トーガからマージョリーの姿が出てきた。右肩を押さえて痛みで顔を歪めている。

「くっ………この私がこんなガキに……」

私は………私は…！

「あ゛ぁぁぁぁぁぁぁああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

突然、マージョリーが群青色の炎に包まれたかと思うと美術館が崩れ始めた。

「悠二！」

シャナは悠二の襟を掴む。彼女の足場にも亀裂が入る。

「シャナ！」

（大丈夫、何でもできる。悠二となら何だってやれる！）

ガラガラ！

足場が崩れ２人は重量に身を任せ落下する。絶叫する悠二だったが地面に叩きつけられる直前、体が浮いた。見るとシャナの背中から紅蓮の翼が生えていた。

２人は少し離れた建物の屋上に着地した。そこにはシャナ達より先

にラミーが立っていた。

「久しぶりだな天壌の劫火アラストール」

ラミーはアラストールに声をかけた。

『久しぶりだな、と言いたいところなのだがな。その前にあの戦闘狂を何とかしなければ』

シャナと悠二は美術館の方へと視線を移しそして目を見開いた。視線の先には群青色の巨大な狼の姿があった。近くの建物が狼から発せられる炎で倒壊する。

「何だよあれ？」

戸惑いの声で訊ねる悠二にアラストールが答えた。

『蹂躙の爪牙マルコシアスの顕現だ』

暴れる群青の狼を見てラミーが解析する。

「マズイな……このままでは封絶が解けるぞ」

「解けるとどうなるの？」

「封絶が解けたら修復は不可能だ。封絶内にいる人間で何人も死者が出るだろう」

悠二が何か言う前に背後から声がした。

「オイオイ、何か随分と愉快なことになってンじゃねェかよ」

「もう少し見物しとくか？」

一方通行と背中から白い翼が生えた垣根だった。ラミーは一方通行を見て声をかけた。

「昨日の少年か？これはまた珍しい所で会ったな」

「オマエが屍拾いかァ、昨日の段階でオマエの名前を知ってりゃァ苦労することはなかったのによォ」

一方通行は愉しそうな笑みを浮かべると再びマルコシアスへと視線を移した。

「さて、あの馬鹿でけェ奴をどォ料理すンだァ？」

誰に訊ねた訳でもないが思ったままのことを口にした一方通行。

「私がやる」

全員の視線がシャナに集まる。シャナは悠二と向き合った。

「シャナ、僕にもできることはあるかな？」

「ある。私達ならきっとやれる」

そう言って笑った彼女の顔は自信に満ち溢れていた。

蹂躙の爪牙マルコシアス（後書き）

この話以降の更新のペースが落ちます。最低でも1週間に一話更新できるように頑張ります。

今そこにいる意味（前書き）

いつも以上にグダってますが温かい目で見てやって下さい！

それではどうぞ

今そこにいる意味

「悠二、アズュールは今持ってる？」

火避けの指輪アズュール、紅世の王狩人フリアグネの所持していた宝具の１つだ。その名の通りフレイムヘイズや紅世の徒の炎に対する絶対的な防御を誇る宝具である。悠二は頷くとポケットからアズュールを取り出した。シャナが悠二に説明をする。

「私がいいって言ったらアズュールで最小限の結界を張って」

「わかった」

突然シャナが顔を赤らめる。首を傾げる悠二だったが理由を悟り同じように顔を真っ赤にした。「オイオイそんなことしてる時間ねェだろォ」と言いたげな一方通行。

「えっと……しがみつくけどいいかな？」

若干戸惑いながら悠二が問いかける。シャナは顔を真っ赤にしたまま、

「早く！」

悠二を急かす。照れながらも悠二はシャナにしがみついた。しがみついたといってもシャナの背中からは紅蓮の翼が生えているため背中にしがみつくのは無理だ。必然的に前となる。悠二なりに考えて『しがみついた』結果、垣根や一方通行から見た『ツンデレ少女シャナを抱きしめる坂井悠二の図』が完成した。

「ちょっと！これじゃ前が見えない！」

明らかに悠二の方が身長は高い。普通にしがみつい（抱きしめ）たりなんかしたら身長差がでるのは当然だ。

「そ、そっか、ごめん」

別に悪くもないのに謝る悠二。俺達がやった方が早かったかな、と思うホスト風少年垣根帝督。シャナは視界確保の為に悠二の頭の位置を下げる。そうなると悠二の顔の前にあるのは、

「痛っ！」

シャナの肘が悠二の脳天に落下した。こんな状況でも本人は意識しているらしい。

バサァ！！

2人は空中へと飛び立つと群青の狼マルコシアスに向かって突っ込んでいく。

バォ！！

マルコシアスが2人に炎弾を連射する。シャナは悠二の体重でバランスを崩しながらも炎弾の嵐を回避しマルコシアスに急接近した。

「悠二！結界張って！」

アズュールで結界を張ると炎の体のマルコシアスの中に2人の体は入って行った。悠二の目に最後に映ったのは群青の炎の中でグリモアを抱えるマージョリーに大太刀を振り下ろすシャナの姿だった。

「……生きてる？」

『みてぇだな』

目を覚ましたマージョリーが倒れていた体を起こすと傍らにグリモアが落ちていた。軽く笑い辺りを見渡すとシャナに悠二、屍拾いラミー、そして垣根に一方通行の5人の姿があった。

「アンタ……」

「よォ三下。オマエ随分面白ェ奴だったンだなァ」
一方通行が笑いながら言う。マージョリーとしてはこの得体の知れない少年に炎弾を撃ち込みたい気分だがそんな力は残っていない。
「お前さん達、銀を探しているのだろう？」
「！」
『テメェ、銀を知ってんのか！？』
ラミーの一言にマージョリーの表情が一変する。
「あれは追うな。いずれ関わることになる、それまで待て」
その言葉を聞いてマージョリーは唇をきつく結ぶと拳を握りしめた。
「そんな……」
シャナが鋭い視線を向けたまま告げる。
「今回は見逃してあげる」
だが、とアラストールが続ける。
『貴様らがまた世界のバランスに影響を及ぼすのなら我らが相手になる』
そう言い終わると5人はその場を立ち去った。残ったマージョリーは不意に笑いが込み上げてきて大声で笑った。

「ラミーを殺すな、世界のバランスを崩すな、銀を追うな、じゃあ他に何が残ってんのかしらね」

5人は美術館から離れた建物の屋上にいた。これから壊れた建物の修復をしなければならないのだ。

「ねぇ、僕の存在の力を使ってよ」

悠二が進言するとラミーは首を横に振った。

「やはり君は零時迷子のミステスか。しかし君の力でなくとも私の溜めてきた力で十分だ」

『しかしお主の力は大切な絵を修復する為に集めてきたのだろう？』

アラストールの言葉にラミーはにっこりと笑うと

「いいのだよ、私はこの力をずっと溜めてきたのだ。たまには無駄遣いしてもよかろう」

そう言って街の修復に取りかかった。修復が終わると同時に封絶が

解ける。

「それでは私は失礼するとしよう。さらばだ零時迷子の少年、天壌の劫火、そして炎髪灼眼の討ち手よ。いやシャナと言うのが正しいのかな？」

そう言った後、一方通行に視線を移し、

「そしてさらばだ、不思議な少年よ」

一方通行は何も答えなかった。しかしラミーは微笑んだまま5人に背を向けた。

『さらばだ、螺旋の風琴リャナンシー』

「螺旋の風琴！？」

アラストールの言葉にシャナが反応した。悠二と垣根は不思議そうな顔でシャナを見る。一方通行は興味がないらしく眠たそうな顔で空を見上げていた。

「誰なんだそりゃ？」

「封絶をはじめとする様々な自在法を編み出してきた高名な自在師よ」

垣根にも一方通行にもその言葉の意味は解らなかったがこれだけは理解していた。「アイツってスゲェ奴だったんだなぁ」と、そう思いながら去っていくラミーの背中を見ていた。

マージョリーはグリモアを抱えてのんびりと街中を歩いていた。とくに行く宛もない彼女は自分がどこを歩いているのか認識すらしていなかった。

「これからどうしよっか……」

『どうしようじゃねぇだろ？前見てみな』

マルコシアスの言葉でマージョリーが前を見ると汗だくでこちらに走ってくる佐藤啓作と田中栄太の姿が見えた。２人はマージョリーの姿を見つけるなり笑みをこぼした。

『どこに行くかってのははっきりしてんじゃねぇか？』

「そうね……」

戦闘狂と呼ばれた女は優しい笑みを浮かべるとこちらに向かって手を振る２人の少年の元へと進んでいった。

翌日、自らに課せられた大量の課題を前に学園都市第1位と第2位の2人はげんなりした顔で放課後を過ごしていた。垣根は3日で学校を2日無断欠席、一方通行に至っては受けた授業はたったの3コマのみ、しかもそれすらまともに受けていないという有り様だ。

「オイオイ、これは新手の嫌がらせかァ？」

ぶつぶつ言いながら課題のプリントにペンを走らせる一方通行。2人ともなんだかんだで真面目にやっているのだ。

「あの教師ムカついた。後で芸術的な死体（オブジェ）に変えてやる」

こまかみに青筋を浮かばせながら猟奇的な台詞を口にする垣根。

「で……聞きてぇんだが……何でシャナと悠二は残ってんだよ。さっさと帰れーっ！気が散るだろうが！」

ホスト少年はにやにやしながら自分と一方通行を眺める炎髪灼眼少女を睨み付ける。悠二はというと苦笑いしたまま山積みされた課題を見ている。

「意識はしてンだなァ、オマエ。まさか炎髪に気があンのかァ？」

「残念だな、俺のストライクゾーンを外れてんだよ。ところでさ、シャナと悠二って付き合ってんの？」

垣根にとっては何気ない一言だったのだが言われた2人は顔を真っ赤にした。

「そんな訳……」

「ち、違う！」

予想より大きな声で悠二の言葉が遮られる。しかし垣根はシャナの反応を見てにやりとするとさらなる一言をぶつける。

「じゃあ何で顔が真っ赤なんだよ。口で誤魔化せても表情に出てるぞ」

「うるさいうるさいうるさい！！違うって言ったら違う！」

何もそこまで否定しなくても、と落ち込む悠二をよそにこのままいくと贄殿遮那で一刀両断されかねないと思った垣根はそれ以上の追及はしなかった。

「なァ第2位、俺たちはここで一体何やってンだろォな」

「まぁいいじゃねぇか、退屈しねぇしよ」

結局課題を全て終わらせた2人は帰路を歩いていた。帰路といってもただ下校しているだけで帰宅している訳ではない。

「何しにここに来たのか……忘れちまったなァ」

一方通行はそう言うと夕焼け色に染まった空を見上げた。

水中騎馬戦

朝、夏の制服の着心地に顔をしかめながら登校する垣根帝督の姿があった。隣を歩く一方通行はあまり気にしていないが相変わらずボタン全開で下には黒地に白のラインの入ったTシャツを着ている。御崎高校でいえば間違いなく不良に部類するだろう。しかし学園都市では滅多に見られない垣根と一方通行の制服姿である。

「何でアイツらはこんな面倒な物を毎日着てんだよ？気持ちわりぃ」

学園都市ではこんなのなかったぞ、と垣根。レベル5の彼らには服装についてはあまりいろいろ言われていなかった。

「大体、学園都市も変に準備がいいンだよなァ」

呆れた顔で一方通行が言う。2人が今着ている御崎高校の制服は学園都市が準備した物だ。この街に入る前に荷物と一緒に渡されたのだ。まるでこちらに長期滞在するのを見越していたように。

「あ～面倒くせぇ」

登校ついでに不良狩りでもしようかな、と思っていた垣根の前を顔に遠くから見ても分かりやすいくらい大きな痣を作った悠二とそれを作ったであろう張本人、シャナが登校しているのが見えた。

「朝っぱらからお熱いことで」

一方通行がにやにやしながら言う。「鍛錬が……」とか「進歩してない…」とか聞こえてくるが何を言っているのかはよく聞こえない。

2人が学校へ着くと池速人がクラスメイトに何か配っていた。

「あ、おはよう。一方通行に垣根」

池は会うなり2人に何かを渡していった。

「何なンだこりゃァ？」

貰った物は何かのチケットのようだ。

「……御崎ウォーターランド？」

垣根がそのチケットらしき紙に書いてあった文字を読み上げる。後で悠二に聞くと最近できた遊泳施設で、池が父親から大量に入場券を貰ったのでクラスメイトに配っているらしい。

「くっだらねェ」

一方通行がぼそりと呟くが垣根は行く気満々である。学園都市にも遊泳施設はあるし、一般の施設より設備がいい所も多い。しかしレベル5の2人はプールに行くことがあまりなかった。

「いいんじゃね？久々に羽根を伸ばしても」

「ならオマエ1人で行きやがれ」

あくまで行かないつもりの一方通行。ちょうどその頃シャナも迷っていた。悠二は行くつもりらしいが彼女はあと一歩の決断ができていなかった。

「ねぇアラストール、どうしようか」

『遊泳施設の入場券か？人間は水と戯れるのを好むからな』

「……」

『垣根や一方通行に聞いてみればよかろう。坂井悠二が行くのならお前も行く必要があるがあの２人のどちらかが行くのなら坂井悠二の監視はそちらに任せてもいいだろう。お前も行くのなら別だがな』

迷える少女はとりあえず考えをまとめるべく自らの好物であるメロンパンを買いに行った。

昼休み、悠二、シャナ、一美、池の４人はいつものように机をくっ付けて昼食を食べていた。今回は垣根も一緒である（悠二が無理に誘ったのだ）。相変わらずコンビニおにぎりの悠二、弁当の池と一美、今日はコンビニ弁当の垣根、やっぱりメロンパンのシャナ、といったところだ。シャナは授業をサボりわざわざ隣町までメロンパンを買いに行っていたのだという。満面の笑みでメロンパンを頬張るシャナの顔に垣根は不覚にも見とれてしまった。

「垣根？」

「あ？な、何だ？」

突然、池に名前を呼ばれ動揺する垣根。まさかシャナの横顔に見とれてしまったなどとは言えない垣根であった。気づけば緒方が立っていた。ぼーっとしていたので話すら聞いていない。

「だから今度の日曜日にみんなで御崎ウォーターランドに行こうっ

て話なんだけどどうする？」

「俺は構わないぜ。どうせ暇だしよ」

実際、学園都市から仕事内容の聞かされていないため時間に余裕はある。

「田中、佐藤！アンタ達も一緒に行くよね？」

緒方は近くでのんびり弁当を食べている2人に声をかける。

「悪いが俺はパス」

「俺もちょっと用事があってさ」

そう言って栄太と啓作は教室を出ていった。一瞬、緒方が寂しそうな表情をしたのを垣根は見逃さなかった。結局、行くメンバーは緒方を含む6人となった。

「まぁ一方通行も連れて来る。アイツもどうせ暇人だろうしな」

垣根が笑いながら空になったコンビニ弁当をビニール袋にしまう。その後、一方通行にそのことを話し、「何勝手に決めてンだよクソ野郎！」という言葉と供にベクトル操作された拳を食らって倒れた垣根を抱え悠二と池は保健室に突撃していった。

当日、集まったメンバーは7人となった。

「結局、来たのね」

その言葉を言われた人物、一方通行は盛大に溜め息をついた。その顔には「何で来ちまったンだァ？」と分かりやすく書いてある。学園都市の頂点、レベル５の２人が、しかも第１位と第２位がこうしてプールに遊びに来るのも珍しい光景かもしれない。

「とりあえず入ろうよ」

入り口へと向かうメンバーをよそに一美は壁に貼り付けてあったチラシを見ていた。

「どうしたの？」

池が訊ねると一美はチラシを指差す。

「これ何かな？」

「水中騎馬戦？イベントか何かかァ？」

確かにチラシには水中騎馬戦と書いてあった。男女ペアで騎馬戦をして優勝者には夜景の見えるレストラン無料招待券や手作りパン食べ放題の他もろもろの景品があるらしい。

「午後からみたいだし、みんなで参加してみない？」

緒方が全員に賛否をとる。参加に手を上げたのは一美、シャナ、池、悠二、緒方の５人、垣根と一方通行は不参加だ。

「じゃあ細かいことは後で決めよう」

そう言って７人は更衣室へ向かった。

「姐さん、ホントにここに入るんですか？」

同じくウォーターランド入り口にて栄太と啓作、そしてマージョリーの姿があった。緒方の誘いを断った2人の用事とは、シャナに負けて以来、啓作の家で酒ばかりのマージョリーを気分転換に外出させることだった。そしてマージョリーが出かけた先がここだったのだ。

「当たり前じゃない。この暑さをしのぐ絶好の場所じゃない」

『家ではずっとエアコン様々だったもんなぁ、ヒャハハハハハハハ！！痛っ！？』

「お黙り馬鹿マルコ」

そう言うとマージョリーはさっさと中に入ってしまった。栄太と啓作はマージョリーを放っておく訳にもいかず仕方なく後を追った。

「ねぇ、一方通行ってどうしてそんなに肌が白いの？」

シャナがプールサイドに座り足だけ水に浸かっている一方通行に訊ねた。髪も肌も真っ白の彼は明らかに目立っていた。

「俺にも詳しいことはわかンねェけどよ、こりゃァ能力の弊害ってヤツじゃねェのか？前にも説明したが俺は生きるのに必要なモン以外のベクトルは反射してる。余計な紫外線も全部反射してる訳だから体が色素を必要としてねェンだろォ」

しかも彼は驚くほどに体が細い。つい女だと思ってしまうほどだ。

一方通行曰くこれも能力の弊害らしい。

「おい、悠二に池！今から４００ｍメドレーで勝負しようぜ！」

一方通行に比べ、垣根は凄い盛り上がり様である。彼を知る者が見れば目を疑うだろう。

「……！」

突然、シャナの目付きが鋭くなった。

「どうしたァ？」

「弔詞の詠み手が来た」

「あの三下が？」

辺りを見渡すが人が多すぎて見つけられない。

「殺気は感じないから大丈夫だと思うけど……、ぎゃふ！？」

突然、シャナの顔面にビニールのボールが直撃した。マージョリーの気配に気を取られてボールに気づかなかったのだ。

「大丈夫？」

悠二が近くに寄る。そんな情けない姿を見られたのが恥ずかしいのか、シャナは顔を真っ赤にすると、

「うるさいうるさいうるさい！！」

と叫び、ウサイン・ボ〇ト顔負けの速度で走り出すとバッシャーンという凄まじい音を立ててプールに飛び込んだ。

騎馬戦の直前、不機嫌そうな顔のシャナを肩車して一方通行は本日で一番大きな溜め息をついた。

（何でこうなったンだァ？）

先ほど垣根と騎馬戦には不参加という一方通行だったが男子の人数が足りず垣根とジャンケンをした結果、一方通行が参加することになったのだ。さらにくじ引きで組み合わせを決めた結果、悠二と一美、緒方と池、そして一方通行とシャナというペアになった。当然、悠二と一美がペアということが気に入らないシャナはふてくされている。一方通行にしてみれば迷惑極まりないがそんなことを気にする彼女ではない。

「お前能力使えば楽勝じゃねぇか？」

垣根がにやにやしながら言う。確かにベクトル操作を使えば優勝は

確定である。しかし優勝など興味のない一方通行は派手に能力を使うつもりはなかった。元々反射はしているため、他の参加者よりある程度優位であるのは明らかだ。

「それでは水中騎馬戦を開始いたします。位置について……よーい……」

ピーッ！

ホイッスルの音で騎馬戦は始まった。悠二・一美ペアは相手のハチマキを取りには行かず、来た相手のみを相手にしている。池・緒方ペアは頭を使った頭脳プレーで順調にハチマキを取っていく。

「面倒くせェ……」

そんなことを呟いていると4組ほどのペアに包囲されていた。

「私の言う通りに動いて！」

仕方なくシャナの指示通りに動く。ベクトルを反射しているので水の抵抗を受けず他のペアより速く移動するとシャナはあっという間に周りの騎馬を討ち取った。

「どう？まだやる？」

全く疲れを見せない2人。周りの騎馬たちは勝てないと思ったのか

シャナを諦め他のターゲットを探しに散った。

「ねぇ吉田さん。このまま時間が経つのを待とうよ。残っていれば参加賞か何かもらえるかも」

「そ、そうですね……」

顔を赤らめながら答える一美。悠二に肩車されているだけでドキドキなのだ。彼女にとってこの時間は幸せだった。しかしその時間を終わらせようとする者がいた。

「悠二〜！」

その者は凄まじい速度で悠二たちに接近する一方通行の上に乗り長い髪をなびかせながら2人に迫ってきた。彼女から殺気迫るものを感じた悠二は動物の本能であわてて逃走する。

「待ちなさい悠二！」

「こっち来んなよ！」

悠二がどれだけ速く逃げても水の抵抗を受けない一方通行には敵わない。すぐ後ろに付くと一美のハチマキにシャナが手を伸ばす。

「吉田さん！姿勢を低くして！」

「はいっ！？」

言われた通り姿勢を低くする。その時、悠二の頭に大きな2つの塊が当たった。悠二は顔を真っ赤にしながら逃げるがそれはシャナの

闘争心を煽る結果となった。

「一方通行！もっと速度あげて！」

「俺に命令すンじゃねェよ」

そもそも仕方なく参加した一方通行は頭の上からいろいろ指示するシャナに苛立ちを感じていた。

「もっと速く追って！」

「人の話を聞けこのクソガキ！」

シャナは悠二を追いかけることに必死である。一方通行のことなど気にしていない。

「もっと速く！」

ついに一方通行の苛立ちが頂点に達した。

「あァ！うざってェ！！」

一方通行はシャナを抱えると前を走る悠二・一美ペアへと投じた。

ドッパーン！！

一美を乗せた悠二は一方通行から放たれたシャナという名の弾丸を食らって撃沈した。こうして波乱万丈の騎馬戦は幕を閉じ、短かったようで長かった日曜日は終わりを迎えた。

ちなみについうっかり緒方に姿を見られてしまった栄太と啓作はそのことについて問い詰められ、必死に言い訳を並べた結果、３日間昼食を奢らされる羽目に合った。

水中騎馬戦（後書き）

今さらですが吉田一美が和美になっていたので訂正しました。ご迷惑をかけて申し訳ありません。

愛染の兄妹

波乱万丈の日曜日から４日、シャナと悠二がいつものように鍛錬をしている頃、垣根帝督は夜の御崎市を歩いていた。学園都市からの連絡もなく暇を持て余していた垣根はどこから見ても『ＴＨＥ・暇人』である。

「何か面白ぇことねぇかな～」

何の目的もなく歩き回るが面白いことなどない。気づけば時計は日付変更直前を指していた。これではただの深夜徘徊する少年である。そろそろ帰ろうかな～、と思っていた彼の視線の先に３人の不良に絡まれる少年の姿が見えた。

不良に絡まれていたのは金髪碧眼の少年だった。暇人垣根は助けてやろうかな～、と思いながら近くに歩み寄る。

スパッ！！

突然、不良達がバラバラになった。垣根はその光景に目を疑う。よく見ると少年の手には大きな剣が握られている。さらに、斬られた不良達が炎となり少年はそれを吸い込んだ。存在を喰らった、垣根はその存在を知っている。

「テメェ……紅世の徒って奴か？」

少年は垣根に視線を向け、次に背後に視線を移した。

「ティリエル、こいつ食べていい？」

少年の背後から少年に瓜二つの少女が姿を見せた。

「どうぞお兄様」

その言葉の直後に少年は垣根に斬りかかった。垣根は未元物質を使用し背中から白い翼を顕現させると少年の一撃を防ぐ。しかし……

「うっ！？」

斬られていないのに垣根はダメージを受けた。肩や足に傷ができている。

「人のこと指さして食べていいだぁ？その上斬りかかって来やがって……ムカついたぜクソガキ。丁度いい、暇潰し程度に遊んでやるよ！」

ゴォ！！

垣根は三対の白い翼を少年に叩きつけた。一本の剣では６方向の同

時攻撃は防げない。

ドゴォン！！

攻撃を防げなかった少年は6枚の翼による打撃を受けた。常人なら元の原形すら留めることのできない攻撃を受けたが少年はよろよろと立ち上がる。

「お兄様！」

後ろで見ていたティリエルがとっさに封絶を張った。しかし、垣根は封絶とは違う雰囲気を感じ取る。しかし目の前にいる徒を逃がすつもりはなかった。

「やっぱりお前も徒か。わりぃがここでくたばってもらう」

垣根が未元物質をさらに展開させようとした次の瞬間、背後から殺気を感じた彼は振り返る。そこにはプラチナブロンドをオールバックにしサングラスをかけた長身の男が立っていた。

「おいおいまだいるのかよ……今日は随分と多いな」

余裕そうな口調で言う垣根だったが男から放たれる異常なまでに強大な気配を肌で感じ取っていた。コイツはヤバい、と頭の中で警報

が鳴るがそれを気にせず男と対峙する。

「邪魔すんなよ。コイツらが終わったら相手してやる」

「残念だがそうはいかんのだ。依頼主を守ることが俺の仕事でね」

「そうかよ、ならお前はその2人の前に順番変更だぜ！！」

垣根は白い翼で凄まじい暴風を起こす。男は暴風に呑まれ宙へ舞う。

「……！？」

突然、男の姿が変化した。垣根の視線の先には長身の男の姿はなく、代わりに巨大な鷲の姿があった。鷲は凄まじい速度で垣根に襲いかかった。

「へぇ～、変わった奴もいるんだな」

垣根は空中に飛び上がると大鷲の攻撃を翼で防御しながらポケットからマッチを取り出した。

「焼き鳥になりやがれこのデカブツが！」

マッチに火を灯しそれを放り投げ再び暴風を起こす。

ゴバァ！！

マッチの炎が炸裂し巨大な壁となって大鷲を包み込んだ。垣根が生み出した暴風は『燃えやすい風』。この世に存在しない物質を作り出す能力だからこそできる技である。

「なるほど、貴様超能力者か」

炎の中から声がしたかと思うと

「……っ！？」

炎に包まれていたハズの男が背後に立っていた。気づけば兄妹の姿が消えている。

「チッ……逃げられたか。でもまぁ、代わりにお前をバラバラにすりゃあいいか」

「俺を倒せると思うのか？おめでたい奴だ。人間ごときにこの千変は倒せない」

「ほざけ、お前が何であろうと死体になることには変わりはねぇ」

垣根が男に突っ込むが男は嘲笑すると

「悪いが俺も忙しいのだ。ここは退かせてもらう」

どこからか巨大な槍を取りだし垣根に振り下ろす。垣根は６枚全ての翼でその攻撃を防ぐが勢いに圧され数メートルほど後ろに吹き飛

んだ。

「くそっ！」

翼を開いた垣根の前に男の姿はなかった。

その頃、悠二とシャナは鍛錬を終えて部屋でドラマを見ていた。ちょうど主人公とその彼女のキスシーンが映っている。悠二が顔を赤らめながらカップ麺をすする。

「キスなんて挨拶みたいなもんでしょ？なんでこんな場面をクライマックスで使うのよ？」

何も知らないシャナが悠二に問いかける。フレイムヘイズとしては優秀な彼女だがそれ以外のことは何も知らないのだ。

「それ本気で言ってるのか？」

マジかよ、と言わんばかりの悠二。彼女と悠二はキスの価値観が違うのだ。

「どうして顔が赤いのよ？」

「べ、別に」

シャナの顔を見ることすら恥ずかしくなった悠二は目を背けてカップ麺をすすった。

「見つからないなぁ贄殿遮那」

「大丈夫ですわお兄様。すぐに見つかりますわよ」

金髪の双子、徒『愛染の兄妹』のソラトとティリエルは公園のベンチで腰を下ろしていた。超能力者というイレギュラーな存在に戸惑ったがこちらには強力な護衛がいるのだ。

「ところで、あの少年はどうだったの？」

サングラスの男はコーヒーを片手に答える。

「久しぶりに興味が沸いた。超能力者ってのは厄介だからな。それにこの街にはフレイムヘイズもいるようだ、まとめて始末する方がいいだろう」

フレイムヘイズということばにソラトが反応する。

「えっ、フレイムヘイズ？どこ？どこにいるの？欲しいよ、贄殿遮那が欲しいよ！」

ティリエルはまるで大きな幼児のような兄を優しい笑顔で見つめながら彼の唇に自分の唇をおしあてた。

「（まったく、この兄妹ときたらすぐこれだ）」

男が呆れたような顔で溜め息をつく。この2人は場所を考えずにこういった行為に走る。お互いを求め合うのだ。街中でもしょっちゅうであるため通行人からの視線が集中する。人間など気にかけないがじろじろ見られているのはいい気分ではない。

「ねぇ、オルゴールって知っているかしら？」

ティリエルが男に問いかけた。

「オルゴール？ミュージックボックスのことか？」

「それもそうだけどこれは少し違うわ」

ティリエルは小さなオルゴールを取りだし不敵に笑う。

「それがお前達の宝具か？」

「ええ、このオルゴールはあらかじめ打ち込んでおけばどんなに複雑な自在法でも奏でてくれるの」

そう言って兄ソラトの顔を見てそれから男に視線を移す。

「貴方にはこれを守ってもらいたいのよ」

「これを？」

「細かいことは後で伝えるわ。だから頼んだわよシュドナイ」

シュドナイと呼ばれた男はやれやれと言いたげな表情をした。

愛染の兄妹（後書き）

ここまでで何かありましたらコメントよろしくお願いいたします。

揺りかごの園クレイドルガーデン

悠二とシャナはいつものように鍛練を終えるとダウンがてらに散歩に出ていた。河原から眺める御崎市の夜景はとてもロマンチックな雰囲気を演出していたが今、この2人にロマンチックなどという言葉は似合わない。しかし、今日の夜空には天の川が出ていて2人は目の前に広がる光景につい見入ってしまった。

だが不運にもその2人の姿を目撃してしまった人物がいた。吉田一美である。愛犬エカテリーナの散歩に来ていた一美はたまたま2人を発見したのだ。池から以前、悠二とシャナの関係はただの友達だと聞いていたがその言葉が逆に重くのしかかる。つい涙を流しながら帰宅した一美だった。

悠二とシャナがしばらく景色を眺めていると向こうから垣根が歩いてくるのが見えた。

「おーす、熱いねぇ御二人さん」

こちらを見るなりニヤニヤしながら垣根が言う。

「垣根はこんなところで何してるの？」

シャナの問いかけに一瞬、表情が歪んだが笑いながら答える。

「徒狩り。昨日の夜奴らに逃げられちまったんだよ」

「奴ら？」

悠二が話に食いつく。シャナも真剣な表情で垣根に訊ねた。

「徒に会ったの？」

「３匹も仕留め損なった。畜生、アイツさえいなけりゃあの気持ちわりぃ兄妹を殺れたのによ。あ、そうだアラストール」

垣根は思い出したようにアラストールに訊ねた。

「アンタ、千変って奴知ってるか？」

『何、千変だと……！奴に会ったのか？』

アラストールの反応をから察するにヤバい奴何だなと垣根は悟った。

「あの野郎にまんまと逃げられたんだよ」

『むぅ……奴がこの街に……しかし何故だ？』

「さぁな、つーか千変って強い奴なのか？」

アラストールは何かを考えているようだったが

『貴様には関係のないことだ。それ以上首を突っ込まない方がいい』

そう言って黙ってしまった。垣根は少し不満だったがシャナも悠二も分からないのならこれ以上問いただしても無駄だと思いそれ以上の追及はやめた。

「じゃあまた明日な」

そう言いながら手を振ってその場を後にする垣根。しかしその表情にはいつものような笑みはなく険しい表情であった。

翌日の昼休み、いつもの面々の昼食は何やらどんよりとした空気が漂っていた。理由は悠二とシャナと一美のことである。昨日の光景を見た一美が池に相談し、そのことに腹を立てた池が悠二を凄い形相で睨んでいるのだ。妙な空気が漂って当然である。池は一美に好意を抱いていた。その彼女が泣きながら相談すれば機嫌がいい訳がない。

「なぁ坂井、お前平井さんと付き合ってるのか？」

池が突然切り出した。一美もその言葉にビクッとする。

「なぁ坂井！どうなんだよ！」

いきなり声を荒げる池に3人の視点が集まる。気づけば近くで垣根がニヤニヤしながらこちらを見ていた。一美は突然立ち上がると教室から出ていった。池は頭を抱えると力なく椅子に腰を下ろした。

「ごめん坂井、僕つい……」

「いいよ池。気にすんなよ」

垣根がこちらにゆっくりと近づいてきた。意地悪そうな笑みを浮かべて池に一言放った。

「池、お前吉田が好きなんだろ？」

学校の屋上の扉を開いた吉田一美は泣いていた。悠二とシャナの姿を見て不安になったのは確かだ。池の一言で悠二との関係は終わってしまったと思ったのだ。屋上には先客がいた。白い髪に赤い瞳、一方通行である。彼はこちらには目もくれず横になって空を見上げていた。

ガチャ……

後ろから扉が開く音がした。続いて聞こえたのは少女の声だった。

「どうして逃げたの？」

声の持ち主はシャナだった。確かに悠二とシャナの関係を知りたかったのは一美である。しかし、それを聞く前に教室を飛び出した自分は逃げたという言葉が相応しいのかもしれない。一美の返事を待たずにシャナはその場を去ろうとする。

「ゆかりちゃんはずるいよ！坂井君にいつも冷たくあたるくせに……私なんかよりずっと仲が良くて…」

「お前には関係ないでしょ」

「関係あるよ！私……私、坂井君のことが好きだからっ！」

シャナの心に今の一言が重くのしかかった。

「ゆかりちゃんは坂井君に好きって伝えたことあるの？」

「……っ！」

「私、坂井君に好きだってちゃんと伝える。伝えてもないゆかりちゃんには負けない」

シャナが何か言おうとした直後に突然、自在法が発動した。

「邪魔してんじゃないわよ！」

シャナの髪が紅蓮に染まる。一方通行もゆっくり起き上がると

「徒かァ？面倒くせェ」

眠そうな顔で呟く。ちなみに彼は今の2人のやり取りを全て聞いていたのでシャナが何故怒っているのかについて何も言わなかった。

しばらくすると悠二と垣根も屋上へ上がってきた。

「これ何なんだ？封絶？」

垣根が興味深そうに周りを見渡す。確かに封絶のような自在法だが明らかに封絶と異なっていた。

「気配が3つ、こっちに2つ近づいてくる。1つは動いていない」

「3つか……」

垣根が拳をパキパキと鳴らす。千変や愛染の兄妹を殺れると思うと自然と笑みがこぼれていた。

「2つはあの兄妹、1つはあの千変って奴だな。シャナ、千変の野郎は俺がやる」

そう言うなり垣根の翼から白い翼が顕現する。

『これだけの術式、維持するためには何か仕掛けがあるのだろう。垣根、貴様は坂井悠二と共にそれを探せ』

垣根は不満たらたらだったが溜め息をつくと悠二と共にその場を後にした。この場に残ったシャナと一方通行は近づいてくる気配の方へと向かった。

「なァ俺も行く必要あンのかァ？」

「ならその辺で見てれば？」

シャナは面倒くさそうな一方通行を置いてさっさと行ってしまった。しばらくすると凄まじい轟音を纏って竜巻がこちらに近づいてきた。

「見てよティリエル！贄殿遮那だ、贄殿遮那があるよ！」

「ええ、もう少しお待ちくださいお兄様」

竜巻の中から愛染の兄妹、愛染自ソラトと愛染他ティリエルが姿を見せた。

「はじめまして、こちらの方は私の兄愛染自ソラト、私は愛染他ティリエル。貴女はどちらの王のフレイムヘイズなのかしら？」

シャナは贄殿遮那を構えると

「私は天壌の劫火アラストールのフレイムヘイズ、炎髪灼眼の討ち手シャナ！」

「天壌の劫火……古い名前ですこと。そんなことはどうでもいいわ、貴女のその刀を頂きたいのだけど」

「奪ってみなさい！」

そう言うと2人に突っ込む。ソラトはどこからか剣を取り出すとシャナの攻撃を受ける。

「っ！？」

いきなり肩に激痛が走った。

「お兄様の剣『吸血鬼（ブルートザオガー）』のお味はどうかしら？存在の力を剣に込めることで剣に触れた相手に手傷を負わせることができるのよ」

シャナは後ろに跳び下がりソラトから間合いを取る。

「厄介ね」

シュルシュル！

突然、何本もの巨大な植物のつたがシャナを襲った。贄殿遮那で切り払うが数が多すぎる。つたは縄のように巻き付くとシャナの動きを封じる。

シュルシュル！

突然、何本もの巨大な植物のつたがシャナを襲った。贄殿遮那で切り払うが数が多すぎる。つたは縄のように巻き付くとシャナの動きを封じる。

「くっ……」

「贄殿遮那は僕の物だ。欲しい、欲しいよ」

ソラトがゆっくりとこちらに近づいてくる。シャナは剣を振ろうとするが身動きが取れない。

「贄殿遮那だ……贄殿遮那の…」

ソラトの手が贄殿遮那に届こうとしたその時だった。

「ッたくうるせェガキだな。ちったァ黙るってことを知らねェのか

？」

愛染の兄妹を衝撃波が襲った。何が起こったのか分からない2人は声のした方を向く。

「さっさと1人で行ってそのザマか？コンな雑魚どもに手こずってンじゃねェよ」

学園都市最強の能力者一方通行だ。いろいろ言っていたが結局来たことに本人は溜め息をつきながら自分自身に呆れていた。

「貴方はもしかして能力者という人間かしら？」

「だったら何だってンだ？」

「人間ごときに私たちの相手ができるのかしら？私のお兄様の餌食になるのがオチよ？」

一方通行は首をコキコキと鳴らすと

「哀れだなァお前、本気で言ってンのなら抱きしめたくなっちまうくらい哀れだわ」

足の裏にかかる運動量のベクトルを操作し凄まじい速度でソラトに突っ込み一気に間合いを詰める。次の瞬間、

ドバァ！！

ソラトの体が山吹色の炎となって爆ぜた。シャナやティリエルには一方通行がソラトに触れたようにしか見えなかった。

「お兄様ぁぁぁぁぁあああああああああああああああ！！！！」

ティリエルの悲鳴に近い叫びが響き渡る。シャナも何が起こったのか分からなかった。シャナは自分に絡みつくツタを振りほどくと一方通行に問いかける。

「今、アイツに何をしたの？」

一方通行はシャナに背を向けたまま答えた。

「アイツの体を内側から爆破してやった」

「でもどうやって？」

「アイツの体を流れる存在の力ってヤツのベクトルを操作しただけだ」

ブウォン！！

ガキィン！！

一方通行が突然の攻撃を反射する。驚く2人の背後にソラトが立っていた。

『馬鹿な！再生が早すぎる！？』

「……！アラストール、この自在法は多分奴らの力を永遠に作り出す物よ」

『なるほど、ならば今の超速再生も納得がいく』

「ならコイツらの核を潰さねェと無駄ってことかァ？」

ティリエルが一方通行に怒りの眼差しを向ける。

「よくもお兄様を……！絶対に許さない！」

そう言うとソラトの元へと駆け寄る。

「お兄様大丈夫ですか？」

「大丈夫だよティリエル」

突然、兄妹はシャナと一方通行の前でキスを始めた。

「なァアイツら2人ともぶっ殺していいンだよな？」

シャナの答えを待たず一方通行は2人に突っ込むとベクトル操作された拳で殴りかかった。2人はそれをかわすと余裕そうな笑みを浮かべた。

「この揺りかごの園(クレイドルガーデン)の中では私たちは無敵よ。例え貴方が強くても何度でも再生できる」

一方通行はにやりと笑うと

「ならテメェらがくたばるまで殺し続けてやるぜこの三下どもがァ!!!!!」

揺りかごの園クレイドルガーデン（後書き）

気づけばお気に入り登録件数２０件、こんな駄作をお気に入り登録してくださっている方々に本当に感謝しています。いろいろ省いたり登場人物のセリフが少なかったりしますがこれからも温かい目で見てやってください。

千変シュドナイ（前書き）

いつもより短いです。

それではどうぞ。

千変シュドナイ

ビルの屋上から弔詞の詠み手マージョリー・ドーは戦況を見つめていた。

「なんかいろいろ面白くなってきたけど私の出番はなさそうね」

『おいおい、こんな祭りに参加しねぇでどうする我が親愛なる契約者マージョリー・ドーよ？』

「チビジャリもあの超能力者もいるみたいだし私に何があるってのよ？敗戦処理？」

後ろから聞こえた足音に振り返ると啓作と栄太の姿があった。マージョリーの自在法で封絶の中でも動けるのだ。

「姐さんは行かないんですか？」

「行くわけないでしょ？今回の徒は私が狙いじゃないみたいだしわざわざ行く必要がないのよ」

やる気のないマージョリーを見て栄太はその背中に一言放った。

「俺たちが足手まといだからですか？」

「……」

啓作はマージョリーに背を向けると

「なら俺たちだけで徒をぶっ飛ばしてきます」
どこから取り出したのか金属バットを握りしめ栄太と一緒に行こうとする。マージョリーは溜め息をつくと
「わかったわ。2人とも、とりあえず玻璃壇の所まで行くわよ」
グリモアに乗って廃デパートへと向かった。

「ったく、どこにあるんだよ！」
愛染の兄妹の自在法『揺りかごの園』を維持するための宝具を探していた悠二と垣根だったが何の当てもなく探し続けていた。
「待て、何かいる」
垣根が指さしながら悠二に言う。視線の先には奇妙な形をした巨大植物がいた。
「何だあれ、もしかして燐子かな？」
「何はともあれ消しておくに越したことはねぇよ」
垣根は能力を行使し背中から白い翼を発現させると6枚の翼を巨大

植物に叩きつける。植物はバラバラに弾け垣根はつまらなそうな表情をするが

「垣根！」

悠二の声に辺りを見渡すとすぐ傍で新たな巨大植物が生えてきた。

「やっぱ核を潰さねぇとダメか……」

垣根は新たに生えてきた植物型燐子を再び能力で吹き飛ばす。その光景を見ていた悠二の肩を後ろから誰かが掴んだ。

「徒っ！？」

振り返るとそこには驚いた様子の弔詞の詠み手マージョリー・ドーの姿があった。玻璃壇を使って敵の自在法を確認していたのだが封絶の中で動くトーチを発見し様子を見に来たのだ。

「アンタ、やっぱりミステスね？前に会った時に薄々気づいてはいたけど」

『しかも封絶の中で動いてるってことは……！』

マージョリーが垣根に気づきまじまじとその姿を眺める。

「アンタも能力者？前に会った時とはイメージ違うわね」

「そりゃこっちのセリフだ。何だよその闘争心のねぇ腑抜けた面は？」

マージョリーは垣根の挑発には乗らずに悠二に状況を確認した。垣根が舌打ちするがそれを無視し悠二はマージョリーに状況を説明する。

「なるほどね、それであのチビジャリと白髪の能力者が徒と戦ってんのね」

『しかも残りの一匹は千変かよ、なんとも大盤振る舞いだな！』

とにかく3人で自在法を制御する為の宝具を探し出さなければならない。徒の気配や存在の力は3人とも感じとることができるため、宝具を探し当てるのにそうは時間はかからないだろう。3人は存在の力を感じとりながら足を進める。御崎市にある鉄橋の近くまできたその時だった。

「待て、ここから先は行かせる訳にはいかんのだ」

サングラスをかけた男、千変シュドナイが行く手を阻んだ。

「久しぶりだな弔詞の詠み手、それと蹂躙の爪牙。それと貴様はあの時の能力者か」

「今度は逃がさねぇぞ千変シュドナイ」

垣根の背中から再び白い翼が現れる。さらに垣根は近くに落ちてた木の枝を拾い上げた。シュドナイは軽く笑うと人間の姿から体は虎、背中には翼が生え鷲のような手足を持つ鵺のような姿へと変化した。

『ヒャハハハハハハハハハハハ！！こりゃ面白ぇ！合成（キメラ）生物もビックリの寄せ集めだな千変！』

「だがそれも今日で見納めだ蹂躙の爪牙！」

鵺（シュドナイ）が3人に殴りかかった。垣根は反応が遅れた悠二を引っ張ると

「悠二、お前は奴らの宝具をさがせ。コイツは俺たちが何とかする」

「わかった」

悠二は千変の死角へと進み難なくその場を突破し走って行った。マージョリーはトーガを纏い戦闘態勢に入る。垣根も能力を使用しシュドナイに突っ込んだ。手には拾い上げた木の枝を持っている。

「そんなもので何ができる！」

すると垣根は槍投げ選手のように枝をシュドナイに投げつけた。避ける必要すらないと思ったシュドナイはその枝を手で払った。

「そんな物でもいろいろ使い道があるんだよ」

「何！？」

ドゴォ！！

枝はシュドナイの腕に突き刺さりそして爆発した。シュドナイも、それを見ていたマージョリーも今何が起きたのか解らなかった。

「俺の未元物質（ダークマター）は元々この世に存在しない物質を作り出す能力、つまり俺がここに立ってる時点でここはすでにお前の知る空間じゃねぇんだよ！！」

ゴォ！！

6枚の翼がシュドナイに襲いかかる。シュドナイは姿を玄武のような姿へと変えると垣根の攻撃を防ぐ。さらにマージョリーがシュドナイに炎弾を連射し反撃の余地を与えない。

「あまり調子に乗るな！！」

気づけばマージョリーの背後に鵺の姿があった。シュドナイは凄まじい速度でマージョリーに突っ込むと鷲の爪をトーガに突き立てた。

「ぐあああああああっ！！」

『おいマージョリー！』

トーガからマージョリーが出てきた。左肩に傷ができ血が流れている。しかし垣根はマージョリーを心配する様子もなくシュドナイに

翼を叩きつける。

「随分と面白ぇ体だな。アンタを見せ物にすりゃあ金儲けできそうだぜ」

「そんな奴に貴様は敗北するのだ、哀れな能力者よ」

マルコシアスが自在法でマージョリーの傷を治療する間、垣根とシュドナイの戦いは激しさを増していた。

強力な紅世の王『千変シュドナイ』と学園都市第2位の能力者垣根帝督、たった一度お互いの攻撃がぶつかり合うその衝撃波で鉄橋を支える柱に亀裂が入る。シュドナイが垣根に炎弾を放つが垣根はそれを翼で難なくかき消すと暴風を起こして攻撃する。

「いい加減にくたばれこの千変万化の面白野郎が」

「人間にしてはなかなかの腕前だ。だが俺の敵ではないな」

シュドナイは暴風の中を突っ切ると鋭い爪で垣根に襲いかかる。相手を簡単にバラバラにしてしまうような一撃を垣根は白い翼で防ぐが勢いに圧され数メートル吹き飛ばされビルに叩きつけられた。

「……畜生、ムカついた。お前相当なムカつきっぷりだ……」

そう言いながら垣根は意識を手放した。シュドナイはまだ治療中のマージョリーをつかみあげる。

「残念だよ弔詞の詠み手、貴様がこれほど弱くなっていたとはな」

「ええ、今は反撃する力も残っていないわ」

「さらばだ弔詞の詠み手、蹂躙の爪牙」

シュドナイはマージョリーをビルの壁に叩きつけた。垣根、マージョリーを撃退しシュドナイは宝具のオルゴールへと戻ろうとしたその時、

「何だあれは？」

シュドナイの視線の先には彼が守るべき宝具へと近づく悠二の姿があった。

零時迷子の戒禁（前書き）

最近、文の質が落ちてきています。読んで下さる方々に申し訳がないです。今回もぐだってますが温かい目で見てやってください。

零時迷子の戒禁

ビルの瓦礫の中でマージョリーは目を覚ました。最後に覚えているのは自分を投げる千変シュドナイの姿だ。

『よぉお目覚めかい相棒』

「私、生きてるのね……」

マージョリーが辺りを見渡すと自分の頭に包帯を巻く垣根帝督の姿があった。

「アンタも生きてたのね」

「余計なお世話だ、落ちこぼれのフレイムヘイズ」

垣根を無視しマージョリーは啓作と栄太の護符に声をかけたが反応がない。

「一体どうしたのよ……」

『さっきからずっと反応がねぇんだよ』

「マルコそれって……」

グリモアに拳を叩きつけマルコシアスの返答を待つマージョリー。

『相棒、よく考えてみろ。自分の仕事にアイツらを巻き込んだのはお前の責任だ。子分を守るのは親分の仕事、なのにお前ときたら完璧に堕落しやがって子分どもに無駄な心配させやがる』

「でも、少しくらい休んだっていいでしょ？何百年も戦ってきたのよ？」

『フレイムヘイズには休みは許されねぇ。戦い続けるしかねぇんだよ！』

「またいつものように立ち上がるのね……」

マージョリーの周りで群青の炎が渦を巻く。渦はマージョリーを包み込むと瓦礫を吹き飛ばし瓦礫の山の上にマージョリーは降り立った。

「姐さん！」

声のした先には栄太と啓作の姿があった。着ている制服は泥にまみれ所々破れている。

「マルコシアス、アンタ……！」

『ヒャハハハハハ！！俺はただお前がここに埋まってると2人に教えただけだぜ？その後の反応はなかったがな』

マージョリーは舌打ちすると先ほどシュドナイと交戦した方へと視線を移す。

「2人とも、玻璃壇の所に戻りなさい」

「えっ……でも…」

『ヒャハハハハハ！気にするなよご両人。いつもこんな感じだからよ』

ゴバァ！！

瓦礫の山が弾け中から垣根が出てきた。

「垣根！？」

啓作が名を呼ぶと垣根はゆっくりと振り返り栄太と啓作の２人に笑いかけると背中から白い翼を発現させると鉄橋を目指して飛び立った。マージョリーもグリモアの上に乗ると２人へと視線を移した。

「姐さん！徒なんかぶっ飛ばしてください！」

２人に微笑みかけ、自分勝手な親分は戦場へと戻って行った。

「貴様、何をしている？」

シュドナイは悠二をつかみあげる。

「は、放せ！」

「何故封絶の中で動いている……。封絶の中で動けるミステス？まさか貴様は……！」

そう言って鵺の中から人間の姿が出てくる。人間の腕をシュドナイは悠二の腹に突っ込んだ。

「貴様の中にある物が分かった以上、それを貰う他あるまい」

悠二の体の中にシュドナイの腕が入る。シュドナイは悠二の零時迷子へと手を伸ばす……

「ぐあっ……！？」

シュドナイが突然、手を悠二の腹から引き抜いた。手を押さえ苦しそうな声を上げる。

「ば、馬鹿な！？戒禁だと……しかも、この千変を退けるほどの…」

ドゴォォン！！

動揺するシュドナイの背中に群青色の炎弾が直撃する。さらに『異物』の混ざった衝撃波がシュドナイを襲った。

「ぐっ……！？弔詞の詠み手！それに能力者！？」

「垣根帝督だ、ちゃんと覚えてからくたばれよ千変！！」

垣根は炎を作り出しシュドナイに放つ。シュドナイは悠二を放すとマージョリーと垣根に向かい合う。

「くたばり損ないが2匹か、貴様らがどれだけ足掻いても俺は倒せんぞ！」

「ほざけ寄せ集めのびっくりお化けが。未元物質の真髄ってやつを味わってから死にやがれ！」

垣根は翼を巨大化するとシュドナイに襲いかかる。シュドナイは先ほどの打撃攻撃をイメージし翼を受け止めようとしたが

スパァ！

シュドナイの鷲の腕が2本とも切り落ちた。

「馬鹿な！？……くっ！」

シュドナイが苦痛の声を上げる間もなくトーガに身を包んだマージョリーが炎弾を放つ。爆煙が立ち込め鵺の姿が見えなくなる。

ドドドドドドド！！

立ち込める爆煙の中からシュドナイが飛び出した。彼は切り落とされた両腕を再生させると悠二の姿を探す。

（くそっ、逃げられたか……）

「余所見してる余裕があるのかよ！」

再び垣根が刃と化した6枚の翼でシュドナイに切りかかる。シュドナイはそれを回避し垣根とマージョリーに炎弾を放った。垣根は炎弾を翼で防ぎマージョリーは炎弾をかわしシュドナイとの間合いを

詰めた。

「……！」

「これはさっきの借りよ」

ドゴォン！！

「この三下はあと何回殺せばくたばンだよ」

一方通行はソラトを地面に叩きつけると飽き飽きした表情でぼやいた。シャナは巨大植物の輪廻を操るティリエルと交戦中である。

「一方通行！そこどいて！」

シャナは背中から紅蓮の翼を生やすと空中へ飛び上がり贄殿遮那に炎を纏わせると

「やあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

広範囲に巨大な炎の塊を放った。ソラトとティリエルは炎に呑み込まれたが揺りかごの園の効果でソラトは無傷で炎の中から出てきた。

しかしそれとは対称的にティリエルは体が透けている。

「お前体が……」

「お兄様を助ける為なら私はこの身を捧げますわ。全てはお兄様の為……」

ティリエルはソラトを守る為に自分の力を使用したのだ。

「オイ炎髪！俺がコイツらの相手するからテメェはさっさと宝具をぶっ壊してこい！」

一方通行の言葉にシャナは首を振ると

「コイツらは私が遣る！」

そう言って大太刀を構えた。一方通行は溜め息をつくとシャナの顔を見て

「聞き分けのねェガキが強がってンじゃねェよ」

楽しげに笑うと彼女の前に立つ。

「ここはこの俺が後片付けしといてやるって言ってンだ。オマエは坂井と宝具を破壊してこい」

言うが早いか一方通行はシャナの言葉を待たずにソラトに突っ込んだ。シャナはそんな一方通行を見て軽く笑うと悠二の気配のする方へと飛び立った。

「あっ、待ってよ贄殿遮那！」

ソラトがシャナの後を追おうとするが一方通行の拳が彼の頬を捉えた。

ドゴォ！！

ソラトの体が地面に叩きつけられる。さらに一方通行はソラトを叩きつけた際に宙を舞った小石を金髪の少年に向かって蹴る。

ゴォ！という音を立てて小石はソラトに直撃した。

「お兄様！」

「大丈夫だよティリエル」

ティリエルが慌てて近寄るがソラトは平気そうな表情で起き上がると吸血鬼（ブルートザオガー）を構える。

「お前邪魔」

「うっせェンだよ、でけェ赤ん坊が。いい加減黙ってくたばりやがれ」

一方通行が上にかざす。すると彼の頭上でプラズマが発生し始めた。

「もうオマエで遊ぶのはやめだ。ここで破壊してやる」

ゴォ！！

辺り一帯が吹き飛んだ。ソラトとティリエルはプラズマによる攻撃を受けたが存在の力を上手く使うことで攻撃を防いだ。

（この方と戦っていては時間の無駄ですわ。さっきのフレイムヘイズを追うとしましょう）

ティリエルはソラトの手を引きシャナの後を追う。しかしそれを黙って見過ごす一方通行ではない。

「ここまで遣っといてそりゃねェだろ」

風のベクトルを操作し空中飛行を行うと愛染の兄妹を追撃する。

一方、シャナは悠二と合流することに成功していた。

「悠二！宝具は！？」

「多分あそこだよ」

悠二は鉄橋を支える柱のてっぺんを指差した。先ほどから妙な感覚を感じていたのだ。

「行こう悠二」

「うん」

悠二は差し出されたシャナの手をしっかりと握った。

それぞれの思い

シャナと悠二は鉄橋を支える柱のてっぺんへと移動すると視線の先に山吹色に輝くオルゴールが置いてあった。

「シャナ、あれが……」

「うん、あれが奴らの自在法を制御する為の宝具」

ドゴォン！！

愛染の兄妹、ソラトとティリエルが一方通行に追われる形でこちらにやって来た。揺りかごの園の効果で何度も再生を繰り返しているが一方通行は容赦なく攻撃を続けていた。しかし、兄妹の行く先にシャナと悠二の姿があるのを見つけた一方通行は追撃を止め、近くに降り立った。後は任せた、ということらしい。

ゴォ！！

シャナは贄殿遮那に炎を纏わせるとこちらに向かってくる愛染の兄妹へ炎を放った。

そのすぐ傍で垣根・マージョリーとシュドナイは戦いを続けていた。マージョリーはトーガの分身を作り出し全方向からシュドナイに炎弾を放った。さらに垣根が未元物質で『燃えやすい風』を作り出すとマージョリーの炎弾と融合しシュドナイを炎の壁が包み込んだ。

「くっ……！」

ゴォ！！

「（おのれ……このままでは依頼も遂行できん。千変の名折れだ）」

シュドナイはオルゴールを設置した場所を見る。オルゴールの守護は彼の仕事である。暇潰しの感覚で垣根やマージョリーと戦っていたシュドナイだったがここにきて焦りを覚えていた。鉄橋の上の方で火柱が上がっているのが見える。炎の色は、

「紅蓮の炎……！？炎髪灼眼の討ち手だと！？」

「正解だぜクソ野郎！」

垣根が背後から刃と化した翼でシュドナイに切りかかる。不意を突かれたシュドナイは垣根の攻撃をまともに食らい川の中に落下した。

「（愛染の兄妹も相手があれでは敵わないだろう。不本意ではあるがここは退かせてもらう）」

シュドナイは鵺の姿から大蛇の姿へと変わると水中を凄まじい速度で移動する。

『オイオイ、あの千変が撤退してやがる』

「………」

マージョリーは遠ざかる蛇の影を見ていた。しかし垣根は違った。水面に映る影に向かって突撃していく。

「今度こそ逃がさねぇぞ！！」

垣根は翼で起こした衝撃波を水面に叩きつける。水面が割れ一瞬、シュドナイの姿を目で捉えた。

「逃げんじゃねぇぞコラ！」

垣根はシュドナイにさらに続けて衝撃波を放った。轟音とともにいくつもの水柱が上がる。しかし垣根の視線の先には千変シュドナイの姿はなかった。

「あのクソ野郎がぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああああああ

！！！！」

垣根の怒りの叫びが響き渡った。

シャナの放った炎は愛染の兄妹を包み込んだ。

「お兄様……」

自分の力を削って兄へと注いでいたティリエルは優しい笑顔を浮かべてゆっくりと消えていった。さらにシャナの炎はオルゴールを破壊し自在法を解く。

「やあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

ソラトが吸血鬼（ブルートザオガー）を構え突っ込んでくる。しかしシャナは贄殿遮那を上に放り投げた。

「あ！贄殿遮那！」

元々、贄殿遮那が目当てだったソラトは視線をシャナから贄殿遮那へと移す。その隙だらけの体にシャナの拳が入った。ソラトがバランスを崩してよろめく間に落ちてきた贄殿遮那をキャッチすると

「（……ごめん…）」

ズパァ！

金髪の少年の体は十字に切り捨てられた。体が山吹色の炎となって消えていくソラトの姿を見て一方通行がシャナに問いかけた。

「もォ終わったのかァ？」

シャナは無言で頷く。一方通行はソラトが残した吸血鬼を拾い上げ（本来、かなりの重量だが重力のベクトルを操作している）シャナ、悠二と共に下へ降りると疲れた顔で座り込む垣根と傷口を軽く手当てしているマージョリーの姿があった。

「お疲れさん、もう終わりか？」

「うん、もう終わり。後は壊れた部分を修復するだけ」

シャナが悠二の存在の力を使用して修復を行っている間、マージョリーが一方通行が手にしている吸血鬼を指差した。

「アンタそれは？」

「あのクソガキの所持品だ。俺には必要ねェからテメェにくれてやる」

そう言って一方通行は吸血鬼をマージョリーに手渡した。マージョ

リーは剣を軽く振ると肩に担ぐようにして自分の帰りを待つ2人の少年の元へと戻っていった。

街の修復が終わると4人は学校へと向かった。一方通行とシャナは屋上へ、悠二と垣根は教室へと足を運ぶ。それぞれの思いを胸に……

「私、ゆかりちゃんには絶対負けない！」

「私だってお前なんかに負けない！」

屋上で一美の宣戦布告を受け取るシャナ、

「池、お前……」

池の思いを知る悠二とそれを察していた垣根。そして真っ昼間なのにも関わらずマージョリーの酒盛りに付き合わされる啓作と栄太。先ほどまでの戦いが嘘のように日常の中でよくある光景が広がっている。いつものように何も変わらず。

ただ1人を除いては。

「実験だと？」

シャナと一美が去った後、一方通行は屋上で学園都市からの連絡を受けていた。電話の相手は学園都市の研究員からである。

「その実験の内容は？」

「……。」

「本気で言ってやがンのか？俺がそンな実験受けるとでも？」

「……。……。」

「チッ、分かった。今から戻ってその実験ってのを受けてやる。細けェことは後で聞く」

携帯の通話ボタンを切ると一方通行は空を見上げた。

「絶対能力者（レベル６）かァ……」

翌朝、一方通行は学園都市からの呼び出しに応じ御崎市を後にした。誰にも一言も話していなかったため垣根ですら突然の呼び出しに首を傾げた。

「俺には何の連絡もなかったんだがな」

先ほどから垣根は携帯の画面とにらめっこしながら愚痴をこぼしている。どうやら一方通行だけ、というのが気に入らないらしい。垣根は垣根で一方通行をライバル視しているし一方通行も垣根を第2位と呼ぶものの対等な関係として見ていた。2人とも、第1位の一方通行だからとか第2位の垣根帝督だからということで区別されるのは嫌いなのだ。

「また戻ってくるかな？」

悠二が垣根に問いかける。

「さぁな」

素っ気なく答え教室を見渡すと啓作と目があった。垣根は溜め息をついて教室を出ていく。屋上へ上がると啓作と栄太の2人が後から来た。

「俺に何か聞きてぇんだろ？言ってみな」

「お前もフレイムヘイズなのか？」

栄太が訊ねた。昨日、瓦礫の山の上に立つ垣根を2人は見ている。封絶の干渉を受けず背中に白い翼を生やした垣根の姿はどう見ても普通の人間ではなかったハズだ。

「そんな訳あるかよ。俺はただの人間、細かく言えば学園都市産の超能力者だ」

「それは絶対ただの人間じゃねぇよ」とつっこみたいのを抑え、啓作は垣根に問いかける。

「じゃあ何で封絶の中で動けたんだ？」

「俺にも分からん」

あくびをしながら垣根は屋上のど真ん中で横になる。

「お前たちはどうなんだ？見たところフレイムヘイズでもねぇ俺と同じただの人間みてぇだが弔詞の詠み手のこと姐さんって読んでなかったか？」

栄太は垣根にマージョリーとの出会い、紅世の世界について彼女に学んだこと等を簡単に説明した。マージョリーの過去や徒に対する憎しみなど詳しく語った。

「なるほどな、アイツの自在式で2人とも封絶の中でも動けるってことか」

垣根がむくりと体を起こすと同時にチャイムが鳴った。昼休み終了のチャイムだが垣根は啓作と栄太の方を向くと

「次の授業って確か英語だったよな？面倒だからここでサボっていようぜ」

笑いながらそう言った。垣根は学園都市について2人に語って聞かせた。能力者のレベルの分類、7人のレベル5の能力者について（自分と一方通行については伏せているが）等のことを話した。普段の垣根ならこんなにおしゃべりではないが気分がいいからかいろいろなことを話した。

こうして垣根、啓作と栄太の仲は今まで以上によくなった。勿論、授業をサボった罰として担当教師から大量の課題を課せられたのは言うまでもない。

それぞれの思い（後書き）

ここまでシャナの原作に沿ってストーリーを進めてきましたが作者の気分で少し禁書の方へ脱線します。（一方通行と垣根だけでは何だか寂しいからです。）もしかしたらこれを機にここまでの駄作がより一層悪くなるかもしれませんが温かい目で読んで頂けるとありがたいです。

垣根帝督

一方通行が御崎市を去ってから早3日。御崎高校のあるクラスでこれから戦争でも起きるんじゃねぇの、と思えるようなピリピリとした緊張感が漂っていた。

その理由は宿泊研修のグループ決めであるが理由はグループの面子ではなく行く場所である。

全員決められた場所へ研修に行くのだが一方通行や垣根が御崎に訪れたことで御崎高校側も学園都市の研修を行うため学園都市に研修の許可を申請。学園都市から返ってきた答えは『教員を除く5名の学生のみ』というものだった。つまり、ラッキーな1グループのみが学園都市へ研修へ行けることになる。田舎に研修へ行くより科学の進んだ学園都市へ行く方がいいという学生が多いのだ。

1グループ5人から7人という班分けで悠二の班にはシャナ、一美、池、緒方といったお馴染みのメンバーとなった。班長は勿論、池速人である。（ちなみにこのグループも他の意味で緊張感ＭＡＸである）

「垣根はどこのグループになった？」

「俺？俺はどこのグループでもねぇよ」

「え？」

悠二の質問に垣根はあっさりと答えた。言われてみれば彼はこのグループ決めの時間、音楽プレイヤーで音楽を聞きながら漫画を読ん

でいたような気がする。しかし研修はどうするのだろう。悠二が訊ねる前に垣根が述べた。

「俺は元々学園都市の学生だから学園都市に戻るのが当たり前だろう？つーことで学園都市行きの奴らのガイドみたいな役回りになるんでよろしく」

そんなこんなでグループ決めも終わり本日最大のイベント、学園都市行きの切符を賭けた戦いが始まろうとしていた。と言っても実際は公平にくじ引きなのだが各グループ長が順番にくじを引くだけでも凄い緊張感が漂う。ドラフトで1位指名の選手をどの球団が取るかをくじ引きで決定するのと同じだ。

「じゃあ同時に開いてください」

先生の声にクラスの視線がグループ長たちに集まる。まさに『世紀の一瞬』みたいな光景だ。くじを開き手を上げたのは、

「おいおいそりゃないぜ」

「くそー結局メガネマンのとこかよ」

「酷いわ池君～」

クラスに広がる落胆の渦。くじを引き当てた池は喜ぶこともできずたったそれだけのことでブーイングを受けるということに苦笑いする。

その日、このクラスでは放課後までメガネマンブーイングが止まらなかったそうな。

「お前らはどこのグループになったんだ？」

垣根が栄太と啓作の2人に訊ねた。啓作と栄太は同じグループになったらしいのだが他の面々があまりパッとせず萎えているらしい。

「それならお前ら、俺が担任に言っといてやるから研修当日は学園都市に行かねぇか？」

垣根が笑いながら（あくまで他のクラスメイトに聞こえないように）2人に提案した。随分ワガママなレベル5である。しかし彼の提案は萎えている2人にしてみればかなりいい提案であった。

「いい考えだろ？」

「確かにあの面子で面倒くさい研修に行くよりはマシだよな」

垣根の提案に2人は顔を見合せる。

「でもどこに泊まるんだ？池たちは学園都市が準備するらしいけど……」

栄太がそう言って垣根の顔を見る。ホスト風の少年はにやりとすると

「俺の部屋に泊まればいいんだよ。元々俺は学園都市に住んでたんだからな」

「おぉーなるほど。なら少しは楽しくなりそうだな」

啓作は表情を明るくすると思い出したように言った。

「マージョリーさんに一言言っとかねぇと」

居候の大酒豪を想像し軽くわらう啓作。そんなこんなで啓作、栄太学園都市研修の計画は着々と進められていった。

学園都市のとある路地裏である実験が行われていた。

「オイオイ！何だ何だよ何ですかァ！？コンなことで俺を殺せると思ってンのかァ！？」

ゴォ！

「がっ……！」

「何度も何度も同じことを繰り返しやがって、学習能力ってもンがねェのかよ！」

ドガッ！

「ぐうっ！」

「もォつまンねェから終わりにしてやる。お疲れさン出来損ない」

血にまみれ、真っ赤に染まった路地裏を返り血も浴びずに静かに歩く白髪の少年。赤い色とは対称的な真っ白い風貌のその少年は実験を続ける。最強から無敵になるために、誰かに認めてもらうために。

「あと１１３０６回かァ……」

どこか寂しげな少年は誰もいなくなった路地裏を進む。聞こえてくるのは彼の足音と溜め息だけだった。

翌日の朝、垣根帝督は坂井家の庭で悠二の鍛錬を見学していた。

「学園都市ってどんな所なの？」

学園都市行きの決まったシャナが木刀を振り回しながら塀の上に座っている垣根に訊ねた。学園都市は科学の進んだ街である。多少のカルチャーショックはあるかもしれない。

「行けばわかる、変わった街だぜ？何せ学生の街だからな」

塀の上から飛び下りると悠二の隣に立つ。

「悠二、交代だ。俺もお前がいつもやってる鍛錬ってやつに挑戦してみてぇ」

シャナは軽く笑うと垣根が何か言う前に木刀を垣根に振り下ろした。垣根は馬鹿にしたような笑顔のまま振り下ろされた木刀を避ける。

「ハハハハハッ！いきなりかよオイ！」

声をあげて笑いながらシャナの攻撃を避ける垣根。どことなく楽しんでいるようにも見える。

『（この男、本当に人間なのだろうか）』

アラストールは黙ったまま垣根帝督という人物について思索していた。シャナはあまり気にしていないがこの少年、普通の人間と思わせる反面、人間とは思えない禍々しい雰囲気を常に纏っている。一方通行に至っては垣根の纏うそれを遥かに凌駕している。

どちらにしろ2人を相手にしてシャナは勝つことができるだろうか？アラストールがそんなことを考えている間に登校時刻になっていた。

「学校か、面倒くせぇな」

垣根はげんなりした顔で呟いた。まともに授業を受けていないが成績はすこぶるいい垣根は学校へ行って授業を受けることに疑問を抱いていた。（それは一方通行も同様である）

「だいたい御崎高校にまともな教師がいねぇんだよ。学園都市でもお目にかからねぇような三流ばかりだ」

鞄を拾い上げると塀を乗り越えてさっさと行ってしまった。

『シャナ、もし仮に垣根や一方通行と戦うことになったとしたらお前はあの者達に勝てるか？』

アラストールはシャナに問いかける。予想外の質問にシャナと悠二は顔を見合せる。そしてあの2人を思い浮かべた。

『未元物質（ダークマター）』の垣根帝督、この世に存在しない物質を作り出しこの世の法則すら塗り替える能力。それは第2位として「神が住む天界の片鱗を振るう者」と称される理由である。

以前、垣根と腕試し程度に戦った時は垣根の経験不足が響いたが実力は五分五分、否、それ以上かもしれない。

さらに学園都市最強の能力者である一方通行（アクセラレータ）は垣根をも上回る実力の持ち主だ。「神にも等しい力の片鱗を振るう者」といわれる彼も

応用の利く能力を使用する。

戦闘狂、殺し屋といった異名を持つ弔詞の詠み手マージョリーすら簡単に退ける実力者だ。

そう考えると自分たちはとんでもない奴らと関わっているのだということを今さらながら気づく悠二。シャナはアラストールからの問いには答えずに仕度を済ませると

「悠二、行くよ」

そう言って悠二を急かす。悠二はあわてて制服に着替え、鞄をひっ掴むとシャナの後を追った。

ちなみに2人並んで登校するシャナと悠二を電柱の影から見つめる吉田一美の姿があったが2人は知る由もなかった。

教室に入ると頭を抱えながらプリントの問題を解いているホスト少年の姿が目に入った。

「ちくしょう……何で俺がこんなことを…」

前記の通り垣根と一方通行はこの学校においてかなりの成績を誇っていた。しかし実は例外となる教科が存在した。

それは国語である。

垣根は頭はいいが言葉の使い道を選ばない。そのせいで記述問題で

いつも×をもらっている。頭がいいのに変なところで損をしているのだ。一方通行はまだ酷い有り様らしい。

そういう訳で垣根は朝っぱらから国語の補習プリントを大量に課せられた。期日は本日2限の授業まで、どう見ても終わるはずがない。どう考えても嫌がらせだろ、と垣根少年は考えた。

（なぜなら根拠として国語の担当教師の顔に、『してやったり』と書いてあったから）

「こんなの終わるワケねぇだろうがぁぁぁぁぁぁあああああああああああああああああ！！あのクソ野郎目に物を見せてやる！」

ついに垣根はプリントを全てくるくる丸めると凄まじい叫び声を轟かせ職員室に突撃していった。悠二とシャナが様子を見に行くと、どんがらがっしゃーん！という愉快な音が職員室からしたかと思うと、

「かっ、垣根！お前っ、教師にこんなことをしていいと思っているのかっ！？常識的に考えて……」

「残念だが俺にその常識は通用しねぇんだよ！」

という妙なところで垣根のキメ台詞が聞こえてきたりドゴォン！という爆音がしたりと職員室内はすでに戦場と化しているようだ。

垣根のストレスが解消され職員室に平和が訪れたのは20分後の朝のHRの前だった。

当然ながら、その日の６コマあった授業のほとんどが自習時間だったそうな。

カムシン・ネブハーウ

学園都市へ宿泊研修に行くグループは他のグループと異なり夏休みの間ということになった。悠二としては夏休み前が良かったのだが学園都市からの条件なので仕方がない。日曜日の朝、起きるとシャナがコキュートスを悠二に手渡した。

「今日は1人で鍛錬してきて」

そう言うと悠二の返事を待たずに部屋を後にした。疑問はあったが悠二はジャージに着替えるとコキュートスを首にかけランニングに行った。

坂井家の台所にシャナと悠二の母、千草の姿があった。シャナが千草に弁当の作り方を教えてほしいと頼んだからだ。垣根の一言がきっかけである。

昨日の放課後、職員室に呼ばれた悠二を待っていたシャナに垣根がにやにやしながら問いかけた。

「お前悠二のこと好きだろ？」

「なっ……！？」

顔を真っ赤にして目をパチパチさせるシャナ。どうやら図星らしい。

「好きなら好きってちゃんと言っとけよ？じゃねぇと他の子に盗られちまうぞ。例えば吉田一美とかな」

一美の名前を聞いて不機嫌な様子のシャナ。垣根はやれやれと言いたげな顔をすると

「恋敵相手に先手を打つならまずは手作り弁当からだろうな。吉田は悠二が毎日コンビニのおにぎりってことを知ってる訳だから向こうが悠二に弁当作ってくる前にお前が作って渡せばいいんだよ」

そう言って目の前の少女の顔を見て確認した。

「一応聞くけどお前料理できんの？」

首を横に振るシャナ。垣根は頭を抱えると

「じゃあ誰か料理ができる人に習うしかねぇか」

「てゆうかどうして弁当を作ること前提で話をしてるのよ」

「じゃあお前は悠二が吉田一美の手作り弁当を食べていても何とも思わないのか？」

この言葉がシャナの決意を固めるきっかけとなり悠二の母、千草に料理を習っているという訳だ。一方、アラストールに散々しごかれた悠二は荒い息づかいでゆっくり河原を歩いていた。

『歩くな、走り続けろ』

「はぁ……む、無理を言うなよ……はぁ…かれこれ３０分くらい走ったじゃないか……」

『仕方のない奴だな。少しだけなら休んでよかろう』

悠二が顔を上げると向こうで大勢の人が何やら祭りの用意をしているのが見えた。

「うわっ、ミサゴ祭りか。もうそんな時期なんだな」

『何だそれは？』

「毎年この時期に祭りがあるんだよ。よく父さんや母さんと行ってたっけ」

「シャナや垣根は行くかな……って行かないか」

『もう休憩は終わりだ。あと1時間くらい走れ』

「冗談じゃない！そんなに走りたけりゃアラストールが走れよ」

『本当に仕様のない奴だな。少しは自覚を持ってもらいたいものだ』

呆れたように言うアラストールを無視して祭りの飾り付け等に視線を移す悠二。祭りの準備をしている大人に混ざってホスト風ヤクザ予備軍少年の姿が見えた気がするが悠二はそれに気づかずランニングを再開した。

垣根帝督は明日に行われるミサゴ祭りの準備に参加させられていた。ケンカを売ってきた不良を返り討ちにして病院送りにしたところ、その不良が祭りの準備に参加する予定だったことを知り、珍しく罪悪感に駆られて手伝いをしているという訳だ。

「ん？アイツ……」

垣根の視線の先にはフードをかぶり、背中に布でぐるぐる巻きにした大きな何かを背負った少年の姿があった。

「おい、そこのお前」

垣根は手に持っていた道具を置くと少年に声をかけた。少年はこちらに気づくと面倒くさそうに聞き返す。「何か用ですか？」

垣根は少年の顔を見て目を丸くした。少年の顔には数多くの傷痕があったからだ。事故で縫ったとかそんなレベルではない。垣根は可能性の意味を込めて問いかける。

「ひょっとしてお前、フレイムヘイズ？」

「ああ、貴方は紅世について知っているのか。しかしフレイムヘイズでも徒でもないが貴方は何者だ？」

少年は鋭い視線で垣根を見る。またこのやり取りかよ、と思いつつ垣根は名乗る。

「垣根帝督、学園都市の能力者だ」

「能力者……」

少年は少し考える仕草をとったが何かを納得すると、

「僕の名は儀装の駆り手カムシン、カムシン・ネブハーウ。不抜の

尖嶺べへモットのフレイムヘイズです」
そう言って手を差し出した。垣根は何の疑いもなくその手を握って握手をする。
「しかし、これで3人目か。この街にはどうしてこんなにフレイムヘイズが集まるのかねぇ」
「3人？ああ確かに他にもフレイムヘイズがいるみたいですが……」
カムシンと名乗った少年はそう言って街を見渡すと再び垣根に視線を移す。
「ちなみに誰なんですか？他のフレイムヘイズは」
「炎髪灼眼の討ち手と確かアイツは弔詞の詠み手だったか？その2人だ」
「ああなるほど。ところで少し頼みたいことがあるんですがいいですか？」
「何だ？」
「この祭りの会場から妙な気配を感じます。念のため貴方に監視をしておいてほしいんです。学園都市の能力者ならそれくらいの仕事は楽勝でしょう。僕はこれからやらなきゃいけないことがありまして」
垣根はげんなりした表情をすると
「結局こういう役回りなんだよな」

と言うと再び祭りの準備へと向かった。垣根が振り返った時、傷だらけの少年の姿はすでになかった。

翌日の放課後、たまたま1人で下校途中の悠二を発見した一美は決意を胸に秘め、彼に声をかけた。シャナに宣戦布告してから悠二にアタックする機会をずっと探していた一美はミサゴ祭りというイベントをフル活用しようという策に出たのだ。

「あ、あの…坂井君」

「吉田さん、どうしたの？」

「あの……よかったら今日一緒にミサゴ祭りに行きませんか？」

恥ずかしさで少し顔を赤らめながらうつむく一美。悠二はそんな一美に優しく笑うと

「うん、いいよ」

悠二の返事に一美は今までにない喜びを感じていたが今は気持ちを抑える。こんなところで失敗する訳にはいかないからだ。

その後、悠二と別れて今にもスキップでもするのでは？と思うくら

いのテンションで帰路を歩く一美の前に少年が現れた。カムシンである。

「あの、どちら様？」

「ああ、それより貴女にやってほしいことがありまして」

カムシンはポケットからある宝具を取り出すと彼女に手渡すと

「今から僕が話すことをしっかり頭に入れてください」

坂井家にて一美と約束をして帰宅した悠二を待っていたのは台所に散らばった黒焦げの物体の片付けだった。結局、シャナのお料理スキルは上達しなかったのだ。

「ったく母さん、何をやったらこんなことになるのさ？」

この惨状を引き起こしたのはシャナだということを悠二は知らない。文句を言いながら片付けを済ませると悠二は一美との約束のため祭りの会場へと出かけた。悠二がどこに行くかを知らなかったシャナは悠二の後を追おうとしたが『ある人物の気配』を感じ振り向いた。

「何だか久しぶりね、戻らないと思ってた」

「俺だってこンな街に戻る予定なンざなかったッつーの。ただ実験の休みてェなモンをもらったから暇潰しに来たってとこかァ」

実験のために学園都市へと帰った男、一方通行が御崎市に戻ってきた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4096w/

とある２人と炎髪灼眼

2011年10月14日07時52分発行